GCOE ワーキングペーパー
次世代研究　102

ジモトという視座――身近な世界を／から批判的に読み解く

川端 浩平
（関西学院大学先端社会研究所専任研究員）
渡邊 拓也
（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）
松村 淳
（関西学院大学大学院社会学研究科後期博士課程）
稲津 秀樹
（関西学院大学大学院社会学研究科奨励研究員）

2013 年 2 月

京都大学グローバル COE
「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」
Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501　京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科
Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp　URL: http://www.gcoe-intimacy.jp/

はじめに

「ジモトという視座――身近な世界を／から批判的に読み解く」

グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」次世代研究ユニット「地域社会で不可視化された領域を考察するための＜方法としてのジモト＞」

2011 年度に引き続き、本ワーキングペーパーで試みているのは、地域社会で親密圏と公共圏が再編成される過程において不可視化されている領域を「ジモト」として考察することを通じて、これまでの地域社会を対象とした研究調査において焦点を当てられることがなかった、もう一つのジモト像を様々な場や人びとの営みから描き出すことを試みる批判的アプローチである。特に、以下に強調する２点を軸に、方法としての「ジモト」の枠組みの構築をめざした。

本次世代研究ユニットが対象とする地域社会をめぐっては様々な研究蓄積があり、その大半は、地域社会で生活する人びとや資源に着目しつつ、それらの可能性をエンパワーする視座からの取り組みである。しかし、第一に、それらの研究においては、地域社会に存在するネガティヴな側面を描いてくることはなかった、もしくは捨象してきたのではないだろうか。そのことによって、地域社会に生じている様々な問題に対する批判的な知が損なわれているのではないだろうか。また、地域社会を対象とする研究者がこれらのことに加担してきた側面もあるのではないだろうか。さらに、第二に、地域社会という概念が社会統合や包摂の意味合いを持つ場面（例えばまちづくり）では、マイノリティの存在が認識されていない場合がほとんどである。マイノリティの存在そのものがある種の地域資源とみなされる場合もあるが（例えばエスニックタウン）、その場合には当該地域社会もしくはホスト社会の外部に位置づけられるのであり、地域社会そのものの変容という認識とは結びつきにくい。少なくとも、地域イメージを高めない存在としてのマイノリティに焦点があてられることはない。

以上のような問題意識を踏まえて私たちは、メンバーがこれまで関わってきた研究調査の事例や運動の実践の場を通じて携わってきた地域社会とともに、それぞれの出身地や現在生活している地域社会など、何かしらの地縁を有する場やそこで生活する人びとを対象とした研究調査を行った。そして、研究者の連携を通じて、それぞれの事例から地域社会

の批判的考察とマイノリティ研究を架橋することにより、地域社会において表象されない領域としてのジモトについて明らかにすることが試みられた。ただし、ジモトという領域を明らかにするための実態調査ではなく、より包括的かつ多角的な視点から地域社会をめぐる現象を批判的に分析する方法としてのジモトに関する理論的枠組みの構築をめざされた。本ワーキングペーパーの構成は以下のとおりである。

１．　川端浩平「越境からジモトへ」

２．　渡邊拓也「ローカルエリートからローカルセレブへ――ゆるキャラとまちづくりに関する一考察（大曽根商店街、名古屋市北区・東区）」

３．　松村淳「建築家の職業アイデンティティの構築をめぐって――カテゴリーをめぐる地方建築家の実践」

４．　稲津秀樹「移動と空間管理をめぐる人びとの日常的実践の場へ――あのとき・あの場所の「重さ」を記述するために」

越境からジモトへ

川端浩平（関西学院大学）

1. 越境とジモト

本稿は、筆者の出身地である岡山での 10 年に及ぶフィールドワークをもとに執筆してきた論考を加筆修正してまとめたものの理論的枠組みの部分に相当する。この自分の出身地で生活する人びとや風景、その背後にある歴史・社会性についての記述は、越境という思考をさらに深めていくために試みられたものである。ここでは、フィールドワークで得られたデータや経験をもとに思考していくために、これらのフィールドワークの前提となっている越境からジモトへという視座について素描することを試みる。

まず、越境という視座は自分が慣れ親しんだ場所から移動して、改めて他地域から自分の出自へと向き合うという視点である。そのとき私たちは、自分が所属していた時空間のなかで共有されるリアリティから解き放たれることにより、かつて埋め込まれていたその場所や様々な関係性を相対化することが可能となる。そしてまた、相対化を通じてこれまで気づくことがなかったオルタナティヴな視点が浮びあがってくる。越境者は、新しく移り住んだ場所にかつて生活していた場所における出来事を絶えず持ち運び、再解釈する。そしてまた、帰省などでかつて生活していた場所に戻ってきたときには、再解釈されたイメージと現実とのあいだでかつて慣れ親しんだ人びととの対話や葛藤といったものを上書きしていく。このように越境という視座を一つの思考実践として位置づけてみると、その視座は、越境者が所属するいずれかの場所において生成されるものであると同時に、その両者あるいはいくつもの場所や関係性の狭間において遂行されていくものである。一つの場所に拘束されていないがゆえに、固定化されたアイデンティティや表象をめぐる時空間の断絶、ズレ、結びつきといったものが発見されていく。本稿で試みられるのも、アメリカ、オーストラリア、日本間の越境を繰り返してきた筆者が、3 つの地域の狭間で発見した断絶、ズレ、結びつきを踏まえつつ日本語で書かれたものである。とはいえ、ここで紡ぎだれた越境者の知や言葉は、アメリカやオーストラリアにも向けられたものでる。いくつもの視点を眼差し、眼差し返される狭間に立って思考実践することによって、いくつもの立場に置かれる自分を一つへと統合しようとするのではなく、むしろ一つへと統合する

ことの葛藤が生じる場面において越境という思考はさらに鋭さを持って推し進められていく。

そして、そのような一つの主体へと統合することの葛藤がもっとも高まるのが、自らの出自に向き合うときである。なぜならば近代社会において私たちは故郷喪失者であり、故郷とは戻ってくることが叶わない場所であるからだ。本稿で筆者が試みたように、たとえ戻ったとしても、そこにはかつての故郷の存在はない。懐かしいという意味での故郷が存在しないとともに、そこで生活している人びとの時間も流れていることが確認されるのである。たとえば岩田重則は、山田洋次の『故郷』（1971）なかから故郷のイメージの変遷をたどり、高度経済成長の終焉である 1960 年代から 1970 年代には、もはや故郷が錦を飾ることのできる存在ではなくなっていることを指摘している（岩田 2000）。また、高度経済成長期において故郷には閉鎖的な村落共同体のイメージがつきまとっていた。そしてそれは、個人の自由を拘束するものでもあった。たくさんの若者が故郷から引き裂かれ、社会的上昇を夢みたのである。そのような時代においては、故郷は出て行くべき場所だった。寺山修司は『家出のすすめ』で次のように述べている。

「わたしは、同世代のすべての若者はすべからく一度は家出をすべし、と考えています。家出してみて「家」の意味、家族のなかの自分…という客観的視野を持つことのできる若者もいるだろうし、「家」をでて、一人になることによって…東京のパチンコ屋の屋根裏でロビンソン・クルーソーのような生活から自分をつくりあげてゆくこともできるでしょう。

やくざになるのも、歌手になるのもスポーツマンになるのも、すべてまずこの「家出」からはじめてみることです。

「東京へ行こうよ、行けば行ったで何とかなるさ」――そう、本当に「行けば行ったで何とかなる」ものなのです。」（寺山 1963）

地方の若者が労働力と期待され「金の卵」と言われていた当時の社会状況のなかで、寺山は故郷から出ていくことの可能性を述べている。しかし、故郷を捨てて東京へと越境した若者たちは、その後いかに故郷の姿を捉えてきたのだろうか。あるいは今日も越境している人びとは自らの過去といかに向き合っているのだろうか。自らが飛び出した故郷と向き合うとき、懐かしいだけではない、変容する故郷のイメージが立ちあがる。その意味で本稿は「家出のすすめ」というよりは、「出て行った場所へ向き合うことのすすめ」としての

「越境のすすめ」を試みている。

越境という経験を過去と切り離して捉える場合の故郷のイメージとは、現在の自分と過去の自分が切り離されることによって、とても安定的でありかつノスタルジックなものである。ただしそのような現状肯定的な価値観を維持することによって、現在と過去は断絶し、私たちは二面性を抱えることになる。二面性とは、二つ（あるいはそれ以上）の場における自分と過去の自分との断絶であり、自分のなかの故郷のイメージと現在の故郷の実態との乖離である。すなわちそれはアイデンティティの喪失を意味する。しかし越境という立ち位置とは本来、いくつもの場所の狭間にあるはずである。ゆえに、かつて越境した場所を安定的なイメージから漏れ落ちるものと結びつけて捉えるとき、本稿で用いる片仮名表記のジモトという視座が立ち上がる。漢字の地元という概念が実態を前提とした静態的な概念であるのに対して、ジモトは当該地域で生じている現象を越境者の視点で捉えるための動態的な視座である（図 1 参照）。そして、いくつもの地を越境してある地域を考察する際には、知をめぐる時空間の断絶、ズレ、結びつきというものが現れ、それぞれの地域表象は揺らぐ。とりわけ本稿では、固定的な地域イメージからは排除された人びとや風景をめぐる過去と現在に向き合うことにより、不可視化された地域社会を掘り下げて理解することを試みる。このような視座に立つとき、ジモトとは決してノスタルジックな場所ではなく、様々な地域社会やそこで生活する人びとの眼差しが交錯する地点において思考を深めていくための一つの立脚点なのである。

【図 1】地元に対するジモトという視座

アプローチ	価値観	表記	考察／分析
地元（実態）	現状肯定	故郷、地元（固定的イメージ）	安定（＋排除）
ジモト（視座）	オルタナティヴ	過去との向き合いによって変容する時空間（流動的イメージ）	排除の時空間

この越境という思考を深めるためのジモトという極めて足場の悪い地点に留まるという

ことは、すなわちグローバル化のなかで流動性の高まる地域社会をめぐる考察を進めていくことでもある。すなわちジモトとは、地元といった固定的なイメージによって実態的に捉えるのではなく、自らの過去とその出自の現在への向き合いによって変容する時空間の流動的なイメージを捉えるための視座である。以下では、筆者のこれまでの越境経験を振り返るとともに、この方法を用いて本稿で検討していくための枠組みを素描する。具体的には、越境経験のなかで再解釈された日常的な出来事と、筆者が留学中に専攻してきた日本研究（Japanese Studies）やその際に援用した社会学やカルチュラル・スタディーズといった学術的アプローチを横断的に結びつけ、越境という経験と方法から見出されるジモトという視座を練りあげていくことを試みる。

2. 越境という視座

Caro, MI 48723

高校 2 年生だった筆者は、1991 年の秋からアメリカの中西部ミシガン州のキャロというまちに留学生として 1 年間滞在した。キャロは、GM 発祥の地であるフリントの周辺部にある人口 4000 人くらいの小さな田舎町である。当時、日米貿易摩擦が高まっていたころであり、この田舎町にもジャパン・バッシングの風が吹いていた。TV の CM からは、地元の自動車販売店の経営者が Don't buy no Japanese car!とアピールしていた。筆者は、Don't と no を同時に用いるのは文法的に誤りではないかと突っ込みつつ、居心地の悪い気持ちがしたものである。同じ高校に通う同級生たちは、デトロイトで日本人と間違えられて中国人が殺された事件が起こったのだと言う。また、GM のプラントを解雇された父親を持つある同級生は、日本人のせいで自分の父親は仕事を失ったと語った。確かにキャロのまちは不景気だった。筆者がホームステイしていた一家の夫婦が同時に失業していた期間もあった。当時 30 歳であった父親のポールは高卒で、マクドナルドでアルバイトをしつつ、翌年オープンすることになっていたウォールマートでの雇用を期待していた。それはまさに、マイケル・ムーアが『Roger & Me』（1989）や『Bowling for Columbine』（2002）において描いていた新自由主義の風が吹き荒れていたムーアのホームタウンであるミシガンの姿だった。グローバル化や産業構造の転換にともない、GM を中心とした雇用は低賃金の海外へと流出し、二度とそこへ戻ってくることはなかった。1995 年には、キャロがあるタスコラ郡の隣にあるデッカービルは、オクラホマシティ連邦政府ビル爆破事件を起こしたティモシー・マクヴェイが潜伏していたことで有名となった。ミシガン市民

軍（Michigan Militia）の人びとは、連邦政府や警察は頼りにならないからと、M16 を掲げて自分たちのことは自分たちで守ると立ち上がっていた。

ただし、ミシガンで起きた出来事や状況を理解できるようになったのは随分と後のことであり、オーストラリアのキャンベラで博士論文執筆のために自分の出身地を対象にフィールドワークを進めるための準備や、マイケル・ムーアのドキュメンタリー作品をキャンベラのシビック（中心繁華街）にあるローニン・フィルムという小さな映画館での鑑賞を通じてのことである。つまり、これまでの自分の経験や記憶が振り返りを通じて再解釈されることによって、過去の記憶や経験に付随していた価値観までもが変化していったのだった。そしてそのような越境という時空間の移動とそれに付随する価値観の問い直しは、地域のイメージをも変容させるのである。

それ以前の筆者にとって、ミシガンでのマイノリティ体験や出来事を振り返ることはそんなに重要であるように感じられなかった。留学当時の筆者は、1 年という限られた時間のなかでいかに充実した日々を過ごすことができるのかという、ある意味とてもポジティヴな感覚でしか様々な出来事を解釈していなかった。キャロという田舎町の若者たちはファッションや音楽センスなどが洗練されていたわけでもなかったし、セックスやドラッグの話で盛りあがり、金曜日の夜にはクルージングに出かける。クルージングとは、マクドナルドやボウリング場を拠点としてキャロのまちを貫く幹線道路の往来を繰り返して友人を見つけては挨拶を交わし、合流して一緒に遊ぶというものだ。そのどれもが、筆者にとっては洗練された遊びというふうに感じられなかった。また、GM のプラントで父親が働いていたという同級生の父親の失業についての語りも、「それはアメリカ人がまじめに働かないだけじゃないか」というふうに受け止めていた。当時の筆者の感覚は、アメリカの中の第三世界的な場所に来てしまったけれど、どうにか一年間を充実させて乗り切らなければというものだった。

しかし、現在の地点からこれらの越境体験を再解釈していくと、先述したようにそれは、グローバル化のなかで製造業に従事していた元労働者たちの世界観なのであり、筆者が経験したものはガッサン・ハージが「内なる難民」（Refugees of Interior）によるパラノイア・ナショナリズム（Hage 2004）と呼ぶものである。ジャパン・バッシングや同級生の私に向けられた日本人に対する嫌悪感とは、紛れもない差別・排除の体験だったと捉えなおすことができる。ただし、そのような観点というのは、社会的上昇を志向する移動の物語においては不都合なものとして浮上してこない。このような留学経験を通じて受けてい

た差別の経験やその意味に気づいたのは、岡山で在日コリアンの若者の聞き取り調査の際に、彼／彼女らからしばしば発せられた「特に差別されたことないから」という発言の意味について考えさせられてからのことである。実際には家族や当人が差別された経験があるにもかかわらず、サバイバルのために現状を肯定しつつ自分自身をエンパワーするために発せられたジレンマを抱えた在日の若者の発言とマイノリティとして白人社会の中でサバイブしていた当時の自分がどこかダブるのだ。ただし当時の筆者はといえば、差別が存在しているという現実からは目を逸らし、同級生たちの「お前の祖父は忍者か？」（Your Grandpa is Ninja?）とか「空手できるのか？」（Show me your Karate move!）といった極めてハリウッド的なステレオタイプな発想に驚きつつも、現在メジャーリーグで活躍する選手たちが過度なお辞儀を用いてチームメイトや聴衆に日本人性を演じるのと同様に、構築された日本人性を戦略的に利用しつつ一年間を乗り切ったのであった。

Westwood, CA 90210

日本の高校を卒業し、1994 年から 1998 年はアメリカの西海岸ロサンゼルスで 4 年間を過ごした。ロサンゼルスは、フリーウェイが発達した自動車中心の都市である。そしてまた、マイク・デイヴィスやエドワード・ソジャが論じているように、まさにロサンゼルスは要塞都市であり、ゲーテッド・コミュニティに代表されるような体感治安が著しく悪い都市である（Davis 1990=2001、Soja 1989=2003）。人びとは、日常生活や消費を通じてセキュリティ意識を醸成している。それは例えば不動産の価格やストリートの名前によってマッピングされる。LA 暴動のゼロ地点やヒップホップのレリックスやギャング抗争で知られるサウス･セントラルやコンプトンといった地域などは危険地帯として認識される。当時筆者が住んでいたアパートにも当然ゲートはあったし、所属していた日系コミュニティの草野球チームの試合でそれらの地域を通過するときには強い不安を感じたものだった。ただし実際には良く知られているように、体感治安の高まりは実際の犯罪率とは反比例の関係にある（浜井・芹沢 2006）。そのことに気づいたのも、岡山の中心市街地における再開発とホームレスの排除をテーマとしたフィールドワークを行っていく過程においてであった。当時のロサンゼルスは、都市そのものの禁煙化（日本でも 2002 年に東京都千代田区で路上喫煙禁止条例が制定されて以来広がっている）が着々と進んでいき、不安と消費がのっぺりとした郊外へと広がる都市に変貌していったのである。割れ窓理論等のグローバル化（Waquant 2011）を通じてまさに同じような変化が岡山に後日訪れるとは想像も

していなかった。

このロサンゼルスにある大学で、東アジア研究（East Asian Studies）を専攻していた筆者が出会ったのが、日本研究（Japanese Studies）だった。かつて『イージーライダー』（1969）においてピーター・フォンダとデニス・ホッパーがアメリカを探して出発したまさにその地で、日本とは何か、日本人とは何かいった素朴なテーマに惹かれて日本や韓国について、アメリカの東アジア研究や日本研究の視点から学んでいったのである。たとえば人類学の授業では、まさに戦後の日米関係を知的な意味で象徴するルース・ベネディクトの『菊と刀』を読んだ（Benedict 1946）。『菊と刀』は、アメリカが戦争の勝利を確信した 1943 年ころ、その後の東アジアにおける軍事的覇権を握るために戦後の日本の民主化にとりくむにあたり、戦中の日本のイメージを刷新する要請を受けて執筆されたものである。ジョン・ダワーが『人種偏見』で明らかにしたように、第二次世界大戦中に新聞等のメディアを通じてユーモアとレイシズムが混ざった日本の表象がアメリカ社会へと広がっていたからである（Dower 1987）。それは今日の、日本のメディアを通じて流れる金正日や金正恩のイメージと同様のものである。ゆえに『菊と刀』はまずその悪魔化されたイメージを刷新するために要請された知であり、さらには、アメリカの民主化の優等生として日本を脈路づけていくための戦後の日本をめぐる知識に関する再出発点であったといえる。その後、高度経済成長を経た日本の経済的成功の秘訣を明らかにするタイプの日本人論や日本文化論においては､アメリカの近代化論の枠組みにおいて日本は論じられていく。エズラ・ヴォーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』は、アメリカへのレッスンという趣旨で、日本的経営やその基盤として営まれている文化が成功の秘訣として語られる。ただし、冷戦が概ね終結し、バブルが崩壊した 90 年代半ばに学生を送っていた筆者にとって、そのようなタイプの日本を捉える知的枠組みは、忍者や空手といったステレオタイプと大差がないように感じられた。むしろ、同じ人類学の授業で読んだノーマ・フィールド『天皇の逝く国で』を通じて、日本の中心としては描かれていない歴史や人びとの営み、それに対する考察を経ることによって、日本人であることや日本文化の意味を相対化していったのだった（Field 1992=1994）。おそらくそこに、ステレオタイプ的な日本イメージに対して自分が何かを語るためのヒントがあることを直感したからだろう。

ACT, Canberra 2601

3 度目の海外への越境はアメリカではなく、オーストラリアの首都であるキャンベラへ

の留学であった。1970 年代後半にアメリカの日本研究に対して胃を唱え、オルタナティヴな地域像を提示したのは越境する知識人が展開したオーストラリアの日本研究であった。アメリカの主流派日本研究の枠組みを前提とした日本人論を批判するというかたちで本質化された日本の地域像やエスノセントリズムに異論が唱えられた。その背景としては、アメリカとは異なるオーストラリアの地政学的条件と結びついて発展してきたオーストラリアにおける日本研究という知的環境が存在していた。

そのようなオーストラリアの日本研究をめぐる知的状況に興味を抱き、オーストラリアの大学で学ぶことを決めたのだった。オーストラリア人にとってみればもっともオーストラリア的ではない大自然のなかにある人工都市で、また日米関係から立ち現れる日本像とは遠く離れた地点から日本社会を捉えなおしていった。同じ新世界ではあるが、アメリカとオーストラリアの雰囲気はまったく異なっていた。これまで経験したことがなかったのんびりとした生活によって、自分自身が志向する価値観も問い直され、研究に対するとりくみも大きく変化した。そしてまた、日米関係を中心に捉えていた筆者の日本のイメージは、指導教官や様々な研究者との出会いを通じて変化していったのだった。後述するが、当時のオーストラリアの日本研究は、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究の影響を受けて、地域を実態的に捉える傾向がある地域研究というアプローチが問い直されていた。よって、グローバル化を通じて再構築される日本の地域や文化イメージへの批判的な視座とともに、植民地的関係性が変容しつつも継続して不均衡が再生産されているといった歴史認識を踏まえた研究が進んでいたのであった。

オーストラリアでの知的環境や研究者との出会いは実に恵まれたものだった。そのなかでも、オーストラリアの先住民であるアボリジニの歴史家である保苅実との出会いは、フィールドワークというその後の研究スタイルを決定づけるものとなった。当時の筆者は、第三章で考察している「平凡なナショナリズム」について日本の 1990 年代半ば以降の歴史認識をめぐる論争の言説分析によって明らかにするものであった。ナショナリズム理論や言説分析のことで頭がガチガチになっていた筆者に対して、「フィールドワークでやってみれば」と助言してくれたのであった。フィールドワークという手法など思いもつかなかった筆者にとってそれは、「そんなのありなのかな」と思いつつ、これでうまくいくのではという確かな感覚のようなものをえることができたのだった。現在の地点から保苅の助言の意味を捉え返してみると、越境という身体感覚に依拠した経験に基づいてナショナリズムや差別の問題に関心があった筆者にとって、そのような自分の経験そのものを考察し、

方法として位置づけるにはうってつけの方法であったといえる。そしてまた新潟という地方都市出身であった保苅とは、グローバル化時代における地方が抱えている様々な問題意識を共有することが可能であった。キャンベラの郊外にある元々はレズビアンバーであったカフェにおける保苅との地方をめぐる議論を通じて、地方の草の根ナショナリズムの実態といった切実な問題から何で地方ではユーミンが流行るんだろうといった些末なことまで、お互いが後にした地方を振り返りつつジモトをめぐる視座というものを共有していったのだった。そのような日々の地方をめぐる議論を通じて、やはり地方のことを研究するということは、自分の出自に向き合っていくべきだとの思いを深めていくことが可能となったのだった。こうして、研究者の出身地をフィールドワークするという大胆な発想へと辿りついたのだった。

ただし、そのように自らの出身地を研究対象とするということは珍しいものではなく、むしろネイティヴ・インフォーマントとしての知的貢献という役割は海外で研究する者に強く求められる役割である。そしてまた、そのような役割に疑問を抱いた研究者も筆者がはじめたというわけではない。オーストラリアには、筆者より先にアメリカを経由してオーストラリアに辿り着き、越境者の視点から固定的な日本のイメージを問い直していた先達の研究が存在していた。以下では、オーストラリアの日本研究の文脈に位置づけて、越境する研究者の方法が依拠している知的環境について整理する。

3. オーストラリアの日本研究

オーストラリアの日本研究は、1917 年にシドニー大学でジェームス・マードック（1856～1921）が日本についての最初の講義を行ったところから始まる。マードックは、スコットランドの貧しい農家に生まれた。アバディーン大学を卒業し、その後はオックスフォード大学などで学んだ。1882 年に勤め先であったアバディーン大学のギリシャ語の助教授を辞し、グラマースクールの教頭としてオーストラリアに赴任する。しかし、オーストラリアで社会主義に傾倒し、教職を辞してジャーナリストとなる。ジャーナリストとなったマードックは、1888 年に中国への取材旅行の帰路で、九州で教師をしていたアバディーン大学時代の友人を訪ねて日本に立ち寄ることとなった。その後、社会主義実現の理想を目指してパラグアイへ行くなどの紆余曲折を経て、1917 年まで日本で過ごした。その間、第一高等学校、第四高等学校などで教鞭を取り、旧幕臣岡田長年の長女と結婚する傍ら、20 世紀初頭の日本史の研究に没頭する。第一高等学校時代には、夏目漱石の英文学の師であっ

たことでも知られている人物である。マードックは、日本の近代化の独自性を高く評価する視点から『A History of Japan』第一巻～第三巻を著した（平川 1984）。その後マードックは、シドニー大学東洋学部（Oriental Studies）の教授となる。しかしこの後しばらくのあいだ、オーストラリアにおける日本研究および日本語教育はあまり発展することはなかった（Low 1997）。第二次世界大戦中は、日本語教育は戦争遂行のための諜報活動に必要な戦略的重要言語とされた。また、オーストラリアが日本の占領に参加した 1945 年から 1952 年のあいだも同様の性格を持っていた（マッキー 2009）。

1960 年代に入ると、豪日経済委員会（The Australia-Japan Business Co-operation Committee）の設立など、豪日関係における経済的な結びつきの強まりを背景として、日本語と日本文学のプログラムが各大学に導入される。オーストラリア国立大学（1962 年）、クイーンズランド大学（1965 年）、メルボルン大学（1965 年）、モナッシュ大学（1966 年）などで日本研究のプログラムが立ち上がっていく。例えばモナッシュ大学の日本研究プログラムの初代教授を務めた J.V.ネウストプニーは、文学研究に特化しがちであった日本語研究を、より実際の日常生活でのコミュニケーションや会話に必要な実学的な側面を重視した教育を進めた（マッキー 2009、Marriot 2009）。

1970 年代の後半になると、日本研究に特化した学会が設立される。豪州日本研究学会（The Japanese Studies Association）は 1978 年に設立された。その時代的背景としては、日豪の経済的関係の強まりと日本について科学的な知見をもとに理解する「日本リテラシー」（Japan Literacy）の必要性から、日本研究・日本語教育への関心の高まりが生じたことがあった。第一回目の豪州日本研究学会の冊子にはオーストラリアにおける日本研究の特徴とは、「日本への情愛に欠けたものでは決してないが、神秘主義・異国趣味・妄想的なものではなく、合理的かつ冷静な研究」をめざすものであるとある。またこのころには、グリフィス大学で The Science with Japanese Program（1978 年）が設立されたように、日本はもはやエキゾチックな対象ではなくなっていった。日本研究は、歴史や文学といった人文科学的なものから、社会科学的なものや「現代日本社会への批判的アプローチ（critical approach to contemporary Japan）」に取って代わられるようになった（Low 1997）。こうして、1970 年代後半以降のオーストラリアにおける日本研究は二つの異なる方向性へと展開していった（疋田 1994）。

一つは、1970 年代末ころからのアジア太平洋地域の共同体構想に対する政治指導者たちの関心の高まりを背景として、日豪の政治・経済面での協働や戦略的な結びつきを重視す

るより政策的志向の強い研究が発展していく（Drysdale 1988）。オーストラリア国立大学の日豪間の経済・政治の研究所である豪日研究センター（AJRC）の初代研究所長であるピーター・ドライスデールは、オーストラリアにおける日本研究を次のように展望している。「オーストラリアにおける日本研究の関心と視点は、北米、ヨーロッパ、東アジアの諸研究とは異なっている。日本研究の発展は、何よりも日本研究が現代オーストラリア社会にもたらす高度の経済的・専門的価値のため、必然的に、日本研究の地盤を提供する大学と、日本研究発展の原動力となる学生を輩出する地域社会によって牽引されている」（ドライスデール 2004）。

筆者が影響を受けたのは、これに対するもう一つの日本研究の流れである。それは、グローバリゼーションのもたらすボーダレス化を前者とは異なる視角から捉えようとするものであった。前者が地域間で引き直される境界線と空間の再編成やそこに築かれる文化を固定的なものとして捉える傾向があるのに対して、後者は固定的に理解されることによって生じる文化ステレオタイプの脱構築を進めていった。日豪間の経済・政治的な結びつきの強化という目的に合致した日本の地域像を捉えるのではなく、日米関係に重きを置いた視点から構築される日本の地域像に異が唱えられた。その背景としては、植民地の独立、産業構造の転換、福祉国家制度の行き詰まりと新自由主義の台頭、冷戦構造の崩壊が、近代に対する反省をともなった価値観と結びついて展開していたことがあった。この展開は、Low が現代日本社会への批判的なアプローチと位置づけているものである。アメリカの近代化論の枠組みのなかに位置づけられた戦後の日本研究の脱構築が試みられていった。ガヴァン・マコーマック、ロス・マオア、杉本良夫といった日本研究者たちは、日本人論の批判を通じて日本研究を問いなおしていく。例えば Low はこのような趨勢を、「オーストラリアン・スタイル・ジャパニーズ・スタディーズ（Australian Style Japanese Studies）」と名づけている（Low 1997）。これらの研究においては、地域や文化といったものが、経済・政治・社会的な力学によって構築されていくものだという動態的な視点が担保されてきたのだった（モーリス＝スズキ 2000=2005, 2009）。またそのような視点は日本一国の近代化のみを問題にしているというよりは、グローバル化が深化する後期近代社会全般への批判的なアプローチでもあった。その中でも筆者が影響を受けたのは、筆者と同様に海外の大学院で学んでいた日本人研究者による、越境というアプローチから日本を考察する方法を展開していった先行研究であった。以下、越境という方法の先行研究の整理を踏まえて、越境という方法にジモトという視座を導入する意義について論じる。

4. 越境という方法

本稿における越境という視座は、日本という時空間から解き放たれることから得られる身体感覚に依拠したところから紡がれる実践的な思考方法である。ただしそれは海外への移動に限定されるものではない。私たちは、自分の生活している時空間への眼差しが自らの移動にともなって変化するということを日常的に経験している。この実践的な思考方法の特徴は、観察者が動きながら考える、あるいは動くことによって生じる諸現象を考察するということである。そしてその際には、ふだんは静態的に感じられる時空間を動態的に観察することが可能となる。それは、静態的な条件において身体化されていた価値観や規範をも揺るがすのである。日々の生活の時空間を息苦しく感じるとき、私たちはカフェに憩いの場を求めることによって、ジョギングへ出かけていつもとはまったく別の方向へと走ることによって、音楽や映画の世界に浸ることによって越境者となる。あるいは、物理的に移動しなくても、睡眠中にみる夢の世界に浸っているときに越境している。そのとき私たちは、日常生活で支配的な価値観を動態的なものとして、変化可能なものとして認識している。これまで自分が積みあげてきた常識、記憶や経験がまったく異なるルールのなかで見つめなおされ、交渉を繰り返し、再編成されていく過程である。本稿の試みである日本やグローバル化といった時空間からの越境という方法は、移動することによって動態的に見えてくる世界の現実への考察を深めるためのフィールドワークであるといえる。

1970 年代末、杉本良夫などオーストラリアに拠点を置く研究者たちは、ヴォーゲルに象徴されるような日本礼賛論の台頭という文脈において日本人論批判を展開していく（杉本 1984)。杉本は「オーストラリアと日本とを移動する「越境人間」としての自分自身の経験をしばしば参照」しつつ「グローバルに移動する身体感覚の具体性を根拠」に展開することにより、文化本質主義やナショナリズムに対する批判を試みたのだった（轡田 2001)。

杉本は日本での新聞記者時代を経て、アメリカのピッツバーグ大学で社会学博士号を取得し、1973 年からオーストラリアのラトローブ大学社会学部で教鞭をとっていた。杉本は、1976 年からグリフィス大学に勤めていたアメリカ人の日本研究者であるロス・マオアと共同研究を進めていく。1977 年にメルボルンの学会で知り合った二人は、1979 年『現代の眼』において日本人論に関する三回の連載を執筆する。日本、アメリカ、オーストラリアという三カ国で生活した経験を持つ二人はオーストラリアを拠点とし、日英両語において日本人論批判を展開していく。二人のとりくみは、オーストラリアの研究者のみならず、

日系アメリカ人の人類学者である別府春海、キャンベラにあるオーストラリア連邦科学産業研究機構の科学者であり、後に被差別部落の研究者となる柴谷篤弘、さらには『思想の科学』で日本人論の特集を組んだ鶴見俊輔といった研究者と結びつくことによって、また日本語で出版されることによって（杉本 1984）、日本や日本文化を理解するためのオルタナティヴな言説としての影響力を持っていく。

杉本のアプローチは以下の二つの意味においてオルタナティヴであるといえる。一つは、アメリカの日本研究やそれを支える近代化論や歴史観、それらを基盤として構築されたステレオタイプやその背景にある国際戦略に対するオルタナティヴとなったことである。二つめは、近代やその生活スタイルそのものへの批判や反省的視座、それに対するオルタナティヴな価値観を基調としている点である。

第一の意味についてより詳細に述べれば、杉本は「周辺国家」であり、「学術文化エスタブリッシュメントの力が弱い」オーストラリアから、アメリカの日本研究や日米間を中心に構築される日本文化の本質主義的イメージに対する批判を展開していく（杉本 1984）。杉本の前には、アメリカとは異なるオーストラリアの地政学的位置がもたらした日本研究という未開拓のジャンルが広がっていたのだろう。例えば、『日本人をやめる方法』では、「日本人論はアメリカとの差異にばかり着目していて、逆に類似性への注目が少ない」という指摘にみることができるように、アメリカの圧倒的なヘゲモニー下にあって見え難くなっている領域に着目している（杉本 1993）。日本人論を基礎づけている歴史観として、アメリカの主流派である日本研究者が、マルクス主義史観に対する自由主義的な史観のなかに発展と伝統の調和モデルをつくりあげてきた問題を指摘している。つまり、第二次世界大戦後の東西冷戦時代におけるアメリカの世界戦略において反共のパートナーであると同時に民主化に成功した優等生としての日本のイメージを規定する近代化論や歴史観が問いなおされているといえる。

第二の点に関しては、杉本は学術的・非学術的な著作を戦略的に分けている。日本語での出版物は主に後者であり、現代オーストラリアの紹介、日本人論批判を通じて、両国の比較分析が行われ、日常的な視点から日本社会が捉えなおされている。それは日本のビジネスマンをターゲットにした著作にも鮮明に打ち出され、オーストラリアというオルタナティヴなライフスタイルの在り方を提示することによって、日本社会で日常を過ごす一般読者へ訴えかける。杉本は、非日本社会に暮らす者にとって、「「日本」とは何かという問題は異文化の中での日常生活の研鑽課題とならざるをえない」。そして、「比較を通しての

考察という主題は、書籍や論文を基礎にした学問の領域だけではなく、日々の暮らしの領域の中で重要なテーマとなる」と述べている（杉本 1984）。杉本は「越境人間」＝「マージナルマン」としてオーストラリアでの日常生活を営むなかで、日本社会の価値観を批判的に捉え返していった。そのような日本社会への批判的な眼差しは、生活者へのアドバイスとして示される。例えば、1983 年にカッパブックスから出版された『超管理列島ニッポン――私たちは本当に自由なのか』の宣伝文句は次のように書かれている。「君は、会社で、学校で、街頭で息苦しくないか――オーストラリア在住の気鋭の社会学者が、日本人の「生活の質」を海外民衆のそれと緻密に比較検討する！」（杉本 1983）。同書では、日本の管理社会とその基盤になっているメリトクラシーといった近代的な価値観が徹底的に批判される。つまり、近代日本に対するステレオタイプの入り混じった表象に対する批判とともに、それを自己イメージとして消費しようとする生活者のライフスタイルに疑問を投げかけている。またそのような日本の生活者に対して、「日本からの難民」（1）としてオーストラリアでいきいきと生活する日本人たちの姿を紹介することを通じて、日本的な近代化を息苦しく生きる人びとへのオルタナティヴなライフスタイルを提案している（杉本 1991）。これに加えて、杉本が社会学的なアプローチによって試みているのが、「体系的な理論構築をめざす社会科学からの観点」より、「日本の経済成長の「秘密」を売り物にする本」に対して、「実証的な比較研究」を立ち上げることである（杉本・マオア 1982b）。杉本は、日豪を越境する過程で出くわす日本人論言説、それを媒介する日豪の研究者、学生、ビジネスマンたちなどなど、越境空間で出会う日本との関係のなかで文化的に均質な「ニッポンの虚像」を押しつけられることへの違和感を問題意識の源泉としている（杉本 1983）。そしてそのような批判的な問題意識を、同様の感覚を身に着けた他の越境する知識人と共有することを通じて、社会学的な理論的枠組みを洗練していったといえる（杉本 1996）。

これらの越境という杉本のアプローチによって、二つの意味におけるオルタナティヴな日本研究を可能としたのは、1970 年代以降に白豪主義を放棄して多文化主義政策へとシフトしていったオーストラリアの社会的土壌であった。杉本が述べているように、「二つ以上の文化に属しながら、どちらの文化にも完全に同化することのない「越境人間」の層が厚くなり、自分の生まれ育った文化背景を、目の前にあらわれる他の文化の鏡に照らして考えるという習慣が日常化する」（杉本 1984）土壌が当時のオーストラリアにはあった。

5. 越境と地域社会のフィールドワーク

1980 年代に杉本らが展開していった日本人論批判を、地域社会におけるフィールドワークを踏まえて、文化ナショナリズム研究という枠組みで体系づけたのは、杉本とも交流のあったイギリスの大学で博士号を取得した吉野耕作だった（2)。吉野は、グローバリゼーションの深化とともに、日本人らしさあるいは日本の近代の独自性を評価する指標が、かつてヴォーゲルが称賛したような日本的経営や日本型の福祉国家制度によって象徴された生産のメカニズムではなく、文化の消費の次元へと推移していると捉える。また、既存の（文化）ナショナリズム研究が国家の中心的役割を重視していたことに対して、市場における文化の再生産と消費の役割の重要性へと目が向けられている。吉野の研究に影響を与えたのは、イギリスの社会学やナショナリズム研究のみではなかった。杉本をはじめ海外の日本研究者やグローバリゼーションとともにイギリスから流出していったカルチュラル・スタディーズとも結びついていく。これらの展開において、オーストラリアの日本研究は新たな学際性を帯びつつ、越境的な知の交流を通じて変容していっていたといえる。

吉野は、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの博士論文をもとに英語で書かれた『現代日本の文化ナショナリズム』を加筆修正した『文化ナショナリズムの社会学――現代日本のアイデンティティの行方』において、杉本らによる既存の日本人論批判の２つの限界点を指摘している。まず、比較の視点の欠如により、日本人論による日本特殊性の強調を批判することが、「日本人論的な知的活動が日本に独自であるという前提をもつことにより、同じ知的文化に拘束されてしまった」こと。さらに、日本人論というテキストの批判に終始するのみでそれがいかに読まれたのかという消費の側面を検討していないことを指摘する（吉野 1997)。そこで吉野は、文化ナショナリズム研究という枠組みに日本人論を位置づけることにより、他国における文化ナショナリズムと比較検討することを試みている。その基礎には、LSE のナショナリズム・セミナーにおいて体系づけられたナショナリズムの社会学という理論的枠組みがある。現代日本社会を事例として参照するという着想もまた、LSE の理論的展開を反映したものであるといえる。そのような理論的基礎を背景に吉野は、知識人・文化エリートなどの「文化仲介者」によるナショナリズムの消費と再生産のメカニズムの次元を実証的な分析対象とする。杉本が学術と非学術の領域に巧みに分担することによって行ってきた日本人論批判や文化本質主義批判を、吉野は文化ナショナリズムの社会学という学術的な枠組みのなかに体系づける。

そこで吉野が試みている研究方法が地域社会のフィールドワークによるナショナリズム

の消費のプロセスに着目した実証研究である。吉野はナショナリズムを社会学的にフィールドワークすることを、「ナショナリズムという一見マクロな現象に社会学的に接近する上で現実的な方法」であると位置づける。ウイリアム・コーンハウザーの「中間集団」という概念に依拠して、ナショナリズム言説を生産する媒体としての役割に着目する。そこで学校と会社を二大中間集団と位置づけ、35 名の教育者（学校教師と校長）と 36 名の企業人を対象として選択する。これらの中間集団は、ナショナリズム言説を再生産する「文化仲介者」として位置づけられる。学校や会社という場における権力関係のなかで、「文化仲介者」のナショナリズム言説は、教育的な言説としても機能する。

吉野は、調査対象地として「中里市」を選択している。その理由は、「産業別人口構成、年齢構成、家族の規模、高校・大学への進学率など人口・社会・経済的指標で全国平均に近く、典型的な日本の地方都市」というものである。つまり、エリート中心的、大都市中心的に描かれることにより一般化される傾向のある日本の文化やナショナリズムといった現象を、典型的な地方都市から捉え返しているといえる。これはまた、ある地域社会におけるローカルな現場での文化ナショナリズムや本質主義的イデオロギーの消費と再生産の次元を明らかにしているといえる。

吉野の議論の背景には、グローバリゼーションにともなう知識人の移動と地域をめぐる知の流動化が存在している。先述の著作に直接的には影響は見られないものの、イギリス発のカルチュラル・スタディーズがオーストラリアの日本研究に与えた知的インパクトと地域と知をめぐる変容をうかがい知ることができる。吉野はカルチュラル・スタディーズとの出会いについて、日本語版のあとがきで次のように述べている。「本家本元であったはずのイギリスに留学していた時には気づかず、大分後になってオーストラリア、ハワイ、シカゴ、カリフォルニア、東南アジアなどで活躍する研究者との交流の中で触発された」（吉野 1997）。吉野も述べているように、カルチュラル・スタディーズは、第二次世界大戦後のイギリスの労働者階級文化の研究として生まれ、パリやフランクフルトの理論家の影響を受けて発展する。しかし、小さな政府を志向する 1980 年代のサッチャー政権と新自由主義の台頭により、大学教員の待遇が悪化し研究者が海外へと流出していった。そして、そのことを通じて、カルチュラル・スタディーズは世界へと伝播していくことになる。オーストラリアでも研究者とともにカルチュラル・スタディーズは流入し、吉野の研究はそのような液状化する知の文脈のなかでリアリティあるものとして受け止められたといえる（3）。また、2000 年代のオーストラリアの日本研究や他の地域研究においても、カル

チュラル･スタディーズやポストコロニアル理論の影響をみることができる。このことは、地域に関する文化の本質主義的な理解を脱構築するとともに、近代主義的な理解に反省を促してきた。

6. 越境と同時代性感覚

カルチュラル・スタディーズを取りこむことにより日本の文化本質主義批判を試みているのが、岩渕功一の『トランスナショナル・ジャパン――アジアをつなぐポピュラー文化』（岩渕 2001）である。同書は、ウエスタン・シドニー大学の博士論文をもとに日本語で執筆された。カルチュラル・スタディーズ、メディア研究、ポストコロニアル研究といった専門領域を横断的に取り込み、文化本質主義へと回帰するナショナリズム言説の消費分析を試みている。これらの学際的な方法によって岩渕が詳細に考察するのは、メディアのグローバリゼーションを通じた、アジア圏における日本のトランスナショナルな文化権力の展開と力学である。杉本や吉野が日本の技術力を賞賛する「ハードテクノ・ナショナリズム」を考察したのに対して、日本のテレビドラマやアニメのような「ソフトテクノ・ナショナリズム」の展開と力学に着目している。岩渕によれば、ソフトナショナリズム言説の特徴とは、「日本の異文化受容能力を本質主義的に規定するハイブリディズム」の称揚であり、アジア回帰への欲望を示すとされる。

岩渕は、日本のテレビ局の報道記者を経て、30 代半ばから研究者になるためにオーストラリアの大学院に進んだ。テレビ局に勤めていた経験と現場に対する知識やネットワークを活かし、東京、台北、シンガポール、香港、クアラルンプールでフィールドワークを行っている。フィールドワークにより、メディアのグローバル化によって促進されている日本のアジア回帰言説に関する批判的な理論枠組みが提示される。

調査対象は、アジア各国のメディアの生産者である現場で働く人々とその消費者である視聴者である。まず、100 人以上のテレビ、音楽、出版、広告産業の第一線で働く人々に対して、東・東南アジア地域における日本のテレビドラマ、ポピュラー音楽と日本における他のアジア地域のポピュラー文化のそれぞれの市場におけるマーケティング戦略､流通、受容に関するデータ収集とインタビューを行っている。さらにシンガポールとクアラルンプールでは、テレビ番組『アジアバグース！』の製作過程に係わる人々と視聴者、台北と東京では好意的に日本と香港のメディアを受容している人々に対面での聞き取り調査を行っている。台北では、日本のテレビドラマ、ポピュラー音楽の受容に関して 20 人の調査

者に、東京では香港を中心とした映画、音楽の受容に関して 24 人の視聴者に魅力について調査している。

岩渕の考察には、先進国の出身である彼自身の越境という経験に対する省察的な眼差しが二つの点で色濃く反映している。一つは、日本のトランスナショナリズムに孕まれたソフトナショナリズムに対する批判の基底にある、「同時代性感覚」（Fabian 1983）に対する問題意識である。それはあとがきの次のような岩渕の認識からはっきりと読み取ることができる。

> 「グローバライゼーション」、「トランスナショナリズム」、「文化混淆」といった国や文化の境界線を越えた繋がりを表す概念に惹きつけられながら大学で研究を行い、オーストラリアで体験する国境を越えた繋がりが日常化し多面化するなかで、世界と繋がることへの希求と実際にナショナルな境界を乗り越えることの落差の大きさ、そして、私が体感した越境が、例えば難民や亡命者と言われる人々のものに比べていかに特権的であるかを繰り返し身をもって気づかされた（岩渕 2001）。

ここで岩渕は､越境を通じて世界と繋がるという幻想と欲望についての反省を促している。これは杉本の越境という視座とも通ずる、いわば越境という時空間の移動に付随する価値観を静態的＝現状肯定的に捉えるのではなく、時として姿を見せる矛盾やズレさらには不平等といったものに対する動態的な視点である。つまり、同じ価値観を共有できるに違いないという同時代感覚はむしろ、グローバル化する世界においては政治・経済・文化における不均衡と格差の進行という現実を肯定する価値観と結びつくことに注意が向けられている。岩渕の場合、オーストラリアでの大学院生としての日常生活のなかで、日本のマジョリティとしての自らの主体が批判的に曝されることを身体的に、そして経験的に受け入れることにより、日本とオーストラリアの日常が批判的に結びつけられている。それは、日豪が同時に経験しているグローバリゼーションと社会的上昇へと誘う同時代的な感覚への欲望に対する批判的な言説を立ち上げるための節合点を示している。

二つ目は、カルチュラル・スタディーズという方法論に関係している。ポストコロニアル理論、グローバリゼーション理論、日本研究、人類学理論、消費社会論などを横断的に取り込む下地となっているのは、メディア研究、オーディエンス研究を中心としたカルチュラル・スタディーズの成果である。インドネシア生まれで、オランダでカルチュラル・

スタディーズを学んだ指導教官のイエン・アングやイギリス文化研究の中心人物であるスチュアート・ホールの理論を援用し、グローバルに同時代的に経験される大衆文化を通じた権力を批判的に考察している。イギリスのネオリベラリズムに対する批判から出発してオーストラリアへと伝播したカルチュラル・スタディーズの理論を通じて、変容する日本の文化本質主義を批判的に検討するための新たな視座を導き出している。

7. 越境からジモトへ

これまで論じてきたように、1970 年代後半からのオーストラリアの日本研究は、アメリカを中心とした日本研究やその基盤にある近代化論に対するオルタナティヴな地域像や価値観を対置することにより発展してきた。そしてそれを牽引してきたのが、越境する知識人であった。移動するからこそ見えてくる動態的な地域アイデンティティの確立をめぐる経済・政治・社会的な背景や権力に対して、そこに隠蔽されている地域像や文化が対置されてきたのだった。そしてまた、このような流れの先駆けとなった杉本良夫の問題意識の根底にあったのは、人びとが国際感覚を身につけ開かれた存在となるためには、まず在日コリアンや被差別部落の人びとといった日本人論からは疎外されてきたマイノリティの存在に目を向けることであった（杉本 1988)。つまり、越境という視座が切り開くオルタナティヴな時空間と固定的な日本をめぐる表象からは漏れ落ちる人びとの時空間を結びつける必要性が説かれている。本稿で試みられるのは、杉本のそのような問題意識や岩渕が述べるような同時代的感覚への批判的視座を継承しつつ、不可視化されている在日コリアンや被差別部落の人びとの現状を地域社会のフィールドワークから明らかにすることである。

だが、本稿ではここでもう一つのことに注意しておきたい。それは、日本人の研究者がアメリカやオーストラリアといった海外の日本研究において果たす知的役割についてである。日本人留学生に限らず、海外での大学院における研究において、自分の出身地に関する研究を求められる場合は多い。筆者の場合はそれに進んでとりくむことを選択したわけだが、そのときに与えられるネイティヴとしての役割には批判的である。ネイティヴの情報提供者であるということは、当該地域を代表することを特権化することであり、かつアメリカであれオーストラリアでの知的枠組みやそこから発生する要請に対して答えるということになる。そのことは、ともすれば、現状肯定的な価値観から地域を静態的に捉えることに加担することであり、動態的なリアリティを明らかにしたり共有したりすることを妨げかねない。このことに意識的であった筆者は、自らの出身地や具体的に知っている人

びとを調査対象にすることを選択した。そのことによって、筆者は日本全般について述べているのではなく、あるグローバルかつローカルな諸事象を越境する視点から分析・記述することが可能となる。また、調査者の手の内にある調査方法や対象者との関係性を透明化することによって、あるいはできるだけ多くの人びととテキストを共有する可能性へと開くことによって、テキストを静態的に理解することを支えるような仕掛けをできるだけ排することを試みた。

さらに冒頭に述べたように、本稿が主に眼目を置いているのは、越境という視点を通じて自らの出自を描く際に想定される時空間やそれを方向づける価値観について検討することである。いくつもの地を越境して、それぞれの地点の狭間に立ち、知をめぐる時空間の断絶、ズレ、むすびつきというものを発見するなかで、様々な地域社会やそこで生活する人びとの眼差しが交錯する地点で思考を深めていくことが試みられる。つまり、杉本らが切り開いてきた越境という方法を、自らの出自に向き合う＝ジモトという視座を通じて練りあげていく。よって本稿では、筆者の出身地である岡山における諸事象を当該地域の利害関係者という立場から、地域社会を批判的に分析することを試みる。以下では、近年の日本におけるジモト／地元をめぐる議論を参照しつつ、本稿を貫くジモトという視座が描き出すオルタナティヴな時空間とはいかなる方向性を持つものなのかについて確認する。

8. ジモト論

本稿では、越境という視点を踏まえて、筆者の出身地でのフィールドワークを通じてジモトというオルタナティヴな時空間を描き出すことを試みている。本稿とは異なる視座からだが、日本の論壇や学術論文においても、オルタナティヴな時空間としての地元／ジモトを描き出す試みや、自らの出身地を批判的な視座から検証する試みは存在している。それらの議論を参照しつつ、本稿が試みるジモトという視座の射程を確認する。

第二章で詳述するが、グローバル化という現象をローカルな固有性を淘汰する均質化の過程であるという危機感が存在している。そのようなローカル性の喪失という危機感に対して、地域社会の再開発からまちづくり、さらにはポピュラーカルチャーの領域において若者たちの地元志向が高まっているという。たとえば鈴木謙介は、片仮名表記のジモトという言葉に郊外育ちの第二世代＝団塊ジュニア世代以降の積極的なエンパワメントの可能性を見出している。それは例えば、ドラマ『ラスト・フレンズ』で描かれている若者たちのシェア・ハウスでの関係性や地域の友人たちの関係性を疑似家族的として見立てるよう

な風潮だと述べている。郊外育ちの彼／彼女らにとっては、いわゆるゲマインシャフト的ではない出身地を、そこに存在する人間関係等を含めてリソースとして再発見しているという（鈴木 2010）。つまり、グローバル化という圧倒的な潮流に巻き込まれた地域社会を生きる人びとが、見通しが悪いなかでもその再編成の流れを読み解きつつ、新たに現れつつある環境へと順応していくことが期待されているといえる。本稿で試みるジモト論に引きつけて整理すると、社会的上昇や移動を果たした親の世代が移りすんだ地を足場として継承し、その場に留まらざるを得ない状況においてジモトに希望が見出されていると解釈できる。

では、そのようなジモトといった感覚に見出される希望といういかなる性質のものなのだろうか。同じく郊外的な環境とはいえど、大都市と地方都市ではずいぶんとリアリティが異なる。たとえば轡田竜蔵は、地方の私立大学を卒業した若者を対象としたフィールドワークに基づき、若者の地元志向現象が社会的包摂／排除と結びついていることを明らかにしている。社会人となった X 大学の卒業生たちは「あなたは地元が好きですか」という質問に「好き」（26 名中 25 名）と答える。轡田はそのように答える彼／彼女らの根拠を、経済的な意味でのメリットと存在論的な意味でのメリットという二つの軸から分析している。そうすると、彼らが根拠として述べる「安定就職」や「安価な生活環境」という発想はとても不安的な現状によって支えられているのであり、「地元つながり」というものの機能は極めてささやかなものであることが明らかにされている。轡田が見出したのは、「決して明るくない自分の将来展望を語りながら、それでも「地元生活」がもたらすささやかな包摂の感覚によって、ぎりぎりのところで自らの存在を支えている当事者のリアリティ」である（轡田 2011）。轡田が述べるような地元志向の意識と実態の乖離が示唆しているのは、鈴木が述べる意味でのジモトという領域が地域社会再編の資源となりうる可能性とともに、困難を伴っているものであるということだ。

ここで轡田が示唆している困難とは、当事者たちが埋め込まれている現状やその背景と結びついてくる階層・ジェンダー・エスニシティといった社会移動を規定する様々な変数であると考えられるだろう。越境という視点からジモトを捉えるということは、グローバルな時空間の再編成を念頭に置きつつも、それがローカルなどのような側面を前景化させ、その反対に後景化することによって不可視化するのかについて捉えていくことである。とりわけ、同時代的な感覚からローカル性の時空間を捉えるのではなく、むしろその逆にそのようなローカル性やその表象に生じているズレや矛盾などを明らかにしていくことによ

り、オルタナティヴな時空間を切り開いていくことが目指される。その場合、差別や排除の問題を軸にジモトの領域を明らかにしていく本稿にとって、地元志向が抱える困難性を掘り下げて検討する必要がある。

地元志向がはらむ困難性の極めて重要な議論として、中心と周縁あるいは都市と地方という長く社会学を中心に論じられてきた議論がある。たとえば自らの出身地である福島の原発問題を主題とした開沼博が指摘しているような「翻弄される地方・地域の問題」の複雑さといった問題、「田舎と都会」といった中央と地方の関係をめぐる考察、「内国植民地」という構図のなかにおける「地方の服従」といった国内の地政学的な問題も踏まえていく必要がある（開沼 2011: 22－42）。開沼が明らかにしているのは、3・11 以降にイシュー化した「フクシマ」は、極めて 3・11 以前の開発主義と地続きであるということである。本稿において考察している領域とは、いわばこの 3・11 以前的な問題であり、あえて挑発的に言うならば「社会問題以前」の社会問題であるといえるかもしれない。

これらの論点を踏まえてジモトという視座の射程を確認するとするならば、それは、いっぽうで越境というトランスナショナルな移動とそれにともなった社会上昇志向に向き合いつつも、もういっぽうで地元志向に向き合い、その両者の狭間で思考することである。そのために、筆者は、出身地である岡山に戻りそこで生活する人びとの過去と現在に向き合ってきた。実際にフィールドワークやインタビュー調査を通じて、地域社会の表象からは不可視化され、これまで筆者が知らなかった、知りえなかったジモトでの出会いや経験を通じて、筆者の出身地をめぐるイメージは再解釈され、新たなる時空間をめぐる想像力を導き出す。

[注]

（1）杉本良夫のパートナーである佐藤真知子は、日本から抜け出しオーストラリアでより良い生活の質や新たなライフスタイルを求めて移住する人びとを「経済移民」と区別して「精神移民」と呼んでいる。佐藤はそのような移住者は経済大国となった日本社会の一つの産物であり、彼・彼女らは日本よりも自由で、個人の権利が大切にされている社会を求めて移住してくるとしている。

（2）吉野は、『文化ナショナリズムの社会学――現代日本のアイデンティティの行方』において、杉本とマオア（1982）を「日本人論を最も早くから展開した社会学者」として位

置づけている。また本稿のあとがきにおいては、海外の日本研究者や日本の社会学者（国際社会学）との研究会や交流を通じて主張や理論的特色が明確になったことについて言及している。杉本に関しては、「アルコールを交わしながらの愉快な会話のなかで元気づけられることが多かった」と特別に言及しているように、海外で社会学を専攻しつつ、日本研究という枠組み引き受けざるを得ない二人の親交が記されている。

（3）吉野は、豪州日本研究学会が発刊している *Japanese Studies* の編集委員を務めている。また、オーストラリアの日本研究者には、カルチュラル・スタディーズを代表する研究者とともに、吉野の研究を参照している研究もみられる。例えば Chris Burgess（2004）は、吉野の議論とともにスチュアート・ホールの理論を援用しつつ、グローバリゼーションの渦中における現代日本社会の単一民族イデオロギーを分析している。増加する移民に対応して掲げられる「国際化」「異文化」「共生」「多文化」といった概念が、日本のナショナル・アイデンティティを揺るがすものとしてではなく、単一民族観や日本文化の特殊性といった考え方を支える役割も果たしていることが検討されている。

＊本稿は、川端浩平（2011）「越境する知識人と液状化する地域研究――オーストラリアにおける日本研究の展開」『オーストラリア研究』24 号、72－88 頁、を大幅に加筆修正したものである。

[参考文献]

Benedict, Ruth（1946）*The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*, Houghton Mifflin.

Burgess, Chris (2004) “Maintaining Identities: Discourse of Homogeneity in a Rapidly Globalizing Japan”, electric journal of contemporary japanese studies, Article 1. http://www.japanesestudies.org.uk/articles/Burgess.html

Davis, Mike (1990=2001) *City of Quartz: Excavating the Future in Los Angeles*, Verso.

Dower, John (1986=1987) *War without Mercy: Race and Power in the Pacific War*, Faber and Faber.

Drysdale, Peter (1988) *International Economic Pluralism: Economic Policy in East Asia and the Pacific*, Allen & Unwin Australia Pty Ltd.

ドライスデール、ピーター（2004）「豪州の大学での日本研究」『AUS e-Study』第 11 号。ajf.australia.or.jp/studyaus/.../docs/Issue_11_Drysdale_article.pdf

Fabian, Johannes（1983）*time and the other: how anthropology makes its object,* Columbia University Press.

Field, Norma (1992=1994) *In the Realm of a Dying Emperor: Japan at Century's End*, Vintage.

Hage, Ghassan（2004）*Against Paranoid Nationalism: Searching for Hope in a Shrinking Society*, Pluto Press.

疋田正博（1994）「オーストラリアにおける日本研究」『日本研究 第 10 集――国際日本文化研究センター紀要』、角川書店、323-329 頁。

平川祐弘（1984）『漱石の師マードック先生』、講談社。

岩渕功一（2001）『トランスナショナル・ジャパン――アジアをつなぐポピュラー文化』、岩波書店。

Iwabuchi, Koichi （2002）*Recentering Globalization: Popular Culture and Japanese Transnationalism*, Duke University Press.

開沼博（2011）『「フクシマ」論――原子力ムラはなぜ生まれたのか』青土社。

川端浩平（2010a）「スティグマからの解放、「自由」による拘束――地方都市で生活する在日コリアンの若者の事例研究」『解放社会学研究』No.21、83-100 頁。

―――（2010b）「岡山在日物語――地方都市で生活する在日三世の恋愛・結婚をめぐる経験から」岩渕功一編著『多文化社会の＜文化＞を問う――共生／コミュニティ／メディア』、青弓社、116-145 頁。

―――（2010c）「もう一つのジモトを描き出す――地方都市のホームレスの若者の事例から地元現象を考える」『関西学院大学先端社会研究紀要』vol.4、関西学院大学先端社会研究所、35-51 頁。

轡田竜蔵（2001）「「平凡なナショナリズム」と「第三世界ナショナリズム」のあいだ」『現代思想』vol. 29-16、青土社、247-262 頁。

―――（2011）「過剰包摂される地元志向の若者たち」、樋口明彦・上村泰裕・平塚眞樹編『若者問題と教育・雇用・社会保障』法政大学出版局。

Low, Morris (1997) "The Japanese Studies Association of Australia: A Short Review", in *Directory of Japanese Studies in Australia and New Zealand*, The Japan

Foundation with the Australia – Japan Research Centre, Tokyo, pp. 42-49.
マッキー、ヴェラ（2009）、JSAA2009 座談会、「オーストラリアの大学における日本語および日本研究プログラム――その制度的な環境と課題」、JSAA-ICJLE 2009 国際研究大会ウエブサイト、http://jsaa-icjle2009.arts.unsw.edu.au/jp/discussion.php
Marriot, Helen (2009) "The development of Japanese Language in relation to Japanese Studies in Australia", JSAA-ICJLE 2009 International Conference, Theme Discussion Panel.
佐藤真知子（1993）『新・海外定住時代――オーストラリアの日本人』、新潮社。
Soja, Edward（1989=2003）*Postmodern Geographies: the Reassertion of Space in Critical Social Theory*, Verso.
モーリス＝スズキ、テッサ（2000=2005）「反地域研究――アメリカ的アプローチへの批判」『地域研究』vol.7 No.1、人間文化研究機構国立民族学博物館地域研究企画交流センター、68-89 頁。
―――（2009）「液状化する地域研究――移動のなかの北東アジア」『多言語多文化――実践と研究』vol.2、4-25 頁。
杉本良夫、マオア、ロス（1982a）『日本人は「日本的」か――特殊論を超え多元的分析へ』、東洋経済新報社。
杉本良夫、マオア、ロス編（1982b）『日本人論に関する 12 章――通説に異議あり』、学陽書房。
杉本良夫（1983）『超管理列島ニッポン――私たちは本当に自由なのか』、光文社。
―――（1984）「「日本人論再考」の舞台裏」『思想の科学』No.43、思想の科学社、2-5 頁。
―――（1988）『進化しない日本人へ――その国際感覚は自画像の反映である』、情報センター出版局。
―――（1991）『オーストラリア 6000 日』、岩波書店。
―――（1993）『日本人をやめる方法』、筑摩書房。
―――（1996）『「日本人」をやめられますか』、朝日新聞社。
鈴木謙介（2010）「当たりくじを見極める足場としてのジモト」（http://bizmakoto.jp/makoto/articles/1004/30/news003_6.html）
寺山修司（1963）『家出のすすめ』、角川書店。
ヴァカン・ロイック（2008）『貧困という監獄―グローバル化と刑罰国家の到来』、新曜社。

Vogel, Ezra, F. (1979) *Japan As Number One: Lessons for America*, Harvard University Press.

吉野耕作 (1997)『文化ナショナリズムの社会学——現代日本のアイデンティティの行方』、名古屋大学出版会。

Yoshino, Kosaku（1992） *Cultural Nationalism in Contemporary Japan: A Sociological Enquiry*, Routledge.

映像

Dennis Hopper (1969) *Easy Rider*

Michael Moore (1989) *Roger & Me*

————（2002） *Bowling for Columbine*

山田洋次（1971）『故郷』

ローカルエリートからローカルセレブへ

——ゆるキャラとまちづくりに関する一考察（大曽根商店街、名古屋市北区・東区）

渡邊拓也

はじめに

2012 年の秋頃のことだった。筆者のジモトであり調査地である大曽根本通（名古屋市）の商店街に、見慣れないものが現れた。

それはご当地マスコット、いわゆる「ゆるキャラ」だった。ほぼシャッター通りと化して久しいこの商店街に、何故（そして今更）このようなものが現れたのかと、驚いて少し調べてみる。公式ホームページ上にも彼の紹介記事が用意されており、名前は「おおぞねこ」と言うらしい[1]。「大曽根」と「猫」とを組み合わせた、清々しいほどストレートなネーミングである。愛くるしい両の瞳の上部には大曽根を表す「Z」の文字が見られ、ゆるやかな曲線を描きながらもシャープに天を指すその両耳は、商店街の入口にあるアーチをかたどったものだった。それは筆者には、かつてこの地にあったアーケードの天蓋さえ想起させた（なお第二のキャラクターに「つくねくん」も存在するが、ここでは割愛させていただく）。

fig.1:「おおぞねこ」の描かれた旗

今日こうしたマスコットキャラクターは、全国津々浦々に見られるようになっている。代表的な成功モデルとしては、彦根の「ひこにゃん」と熊本の「くまモン」を挙げることができるだろう。それらは町の観光大使として、テレビやインターネット上でその存在感を示し、集客と活性化に寄与している。だがそうした成功例はほんの一部である。マスコ

[1] 使用した写真は筆者が撮影したものだが、「おおぞねこ」の著作権は「2012 大曽根本通商店街」および「名古屋市立工芸高等学校 WEB 部」に属していることを、ここに明記させていただく（参考 URL：http://www.ozone-ave.com/）。

ットたちのうち大部分は、ほとんど誰にも顧みられることなく、路傍の名も無き花のようにひっそりと咲き、やがて静かに消えていくのだった。

地域を活性化させること、多くの人を呼び込んで町を盛り上げること、あるいはやってきた人々がお金を使ってくれることで、地元に経済的利益がもたらされること——もしもマスコット主導による「まちづくり」にそうした目的があるとすれば、非常に多くのマスコットたちはその期待にあまり貢献できずにいるということになる。それらは政策的な「失敗」と見なされ、時には皮肉っぽい笑いの対象とされてしまうこともある。だからこそ、こうしたマスコットたちは、言わば「どうでもよいもの」と見なされて、政治学、経済学、社会学の研究対象としてまともに取り上げられることは、これまでほとんど無かったと言っていい。

けれどもこれは、思い切って言えば、「マスコットが作られる目的は地域の（経済的）活性化である」という仮の前提に立った場合の話であるに過ぎない。この小さな論考が書かれる目的は、地域に根付いたマスコットキャラクターの、政策的「地域活性化」以外の場面での存在意義の可能性について論じつつ、特にインターネットの登場によって「ジモト」そして「ローカルなもの」のあり方（存在様式）そのものが変容を被っていった様子について考察することにある。また筆者の関心に引きつけて言えば、この事例は、地域社会の「安心・安全」の確保に関して、（割れ窓理論のような）監視強化のポリティークに対抗するようなオルタナティブな選択を考えていく上で、大きなヒントと示唆をもたらすものでもある。

1.　存在感（プレゼンス）の曖昧な定義

大曽根はかつての中山道と名古屋城とを結ぶ、名古屋市の北東の玄関口に位置している。アーケードの屋根を頂いた商店街は JR 大曽根駅の西側のエリアに伸びていたが、1980 年代後半より「街並み・まちづくり統合支援事業」などの国土交通省（旧建設省）および名古屋市の潤沢な資金援助を受けて、白くて小綺麗な街並へと作り替えられた。それでも遠のいた客足を取り戻すことはできず、現在では営業する店の限られた、シャッター通りに近いものになっている。しかしながら他方で、それは近隣住民の静かな散歩コースと憩いの場所としても機能していた。人通りの少なさと見通しのよい街路の作りが、結果的には

この町にのどかな雰囲気と安心感を与えているのである。昼下がりの喫茶店に入れば、壁掛けテレビのチャンネルはローカルテレビ局に合わせられており、「相棒」のようなサスペンスドラマが再放送されている。ここでは犯罪のようなものは、あたかも画面の向こう側にしか存在していないかのようだった。

もちろんこうした見方には、名古屋に生まれた筆者自身の（好意的な）認知的バイアスも含まれているのだろう。ジモトというものは、人がそこから外に出て、振り返って見た時にようやく現れる何かである。それは記憶の中のノスタルジックな、いつまでも変わらない心象風景としてそこにある。だから、大曽根商店街のアーケードが取り壊された時に、筆者は物寂しい気持ちになったのだけれども、今回の「おおぞねこ」には何の違和感も感じなかったのだった。それはすでに新しい白い町に馴染んでいた、まるで昔からそこにいたかのように。バブルの頃のような交付金給付がもはや望めない今日、商店街に限ったことではないが、活性化の試みの一般的傾向は（箱ものから）ソフトパワー戦略へと推移している。マスコットはそのようにして、地域に活気を取り戻すという名目で生み出されてくるのだった。

ゆるキャラ「おおぞねこ」にデザイナーのクレジット表示はなく、その作者は匿名である。もう少し正確に言えば、それは、商店街からそれほど離れていない名古屋市内のある高校の生徒たちが、クラブ活動の一環として、公式ホームページと一緒に手作りしたものだった。経済的な成功のことは度外視して、自由に楽しんで作るというアマチュアリズム的なコンセプトが、こうしたのびやかな作品を生んだのだろう。

プロのデザイナーに依頼しない、あるいはその土地の若手を起用するといった意味では、手作りマスコットそれ自体は今やそれほど珍しいものではない。ゆるいキャラクターであるが故に、最初からあまり細部までこだわったデザインも不要であって、むしろシンプルでデフォルメされたマスコットの方が、需要が高かったりもする。だが、無意識に「ひこにゃん」「くまモン」のような（稀な）成功例を念頭に置いて考えてしまうような、従来の地域活性化の議論からすれば、こうした「素人の作品」というものは、批判の対象になることはあっても、微笑ましく受け止められることは皆無に等しかった。その批判は自治体（市町村）へと向けられる。まず、無報酬かそれに近い形で、デザインその他の手のかかる仕事を素人たちへと押し付けて「搾取」を行う点、そして、もし集客効果が上がらなかったとしても「素人の作品だから」という言い訳を用意している点。要するに、自治体が本気で「まちづくり（まちおこし）」や地域活性化の問題に取り組んでいるのかという点が、

非難の主な論点となるのだった。

しかし、ゆるキャラをその町を代表する「顔」と見なし、観光のための広告塔と見なすようなこうした見方は、恐らく一面的であり、どこか要点を外してしまっているようにも思われる。言い換えれば、これまでの地域社会論は、地域活性化の「経済的成功」の側面にのみ目を奪われてきたのではないだろうか。訪れる人を増やし、グッズなどの商品を売ることが至上目標として想定されていて、たとえ住民たちが盛り上がっていたとしても、それが継続的集客に結びつかなければ、単なる内輪受けに過ぎないとして批判され、まちおこしの失敗例として棄却されてきたのではないか。しかしながら、それでは新たな可能性の芽を摘んでしまうことにもなりかねない。ここで冷静に振り返って考えてみると、近代社会が「社会的成功」の例として示していたのは、なにも経済的成功＝富の獲得（金持ちになること）だけではなかったはずなのだ。

端的に言えば、「おおぞねこ」の存在意義は、商店街に客を集めて活気を取り戻すことというよりは、まずそこに存在（present）し、周辺に住む地域住民の「目に留まる」ことによって、ささやかな共通の話題を提供しうる点にあるのだった。大曽根の商店街は、1980年代のまちづくり・地域活性化政策の時期に、白くて奇麗な街並みへと生まれ変わったけれど、それからもう随分と長い間、商店街の体をなしていなかった。むしろ通りの車両規制のおかげで、今日ではそれは近隣順民の憩うのんびりした遊歩道に近いものとなっている。ゆるいマスコットたちは、そうした町の風景に不思議とフィットする存在だった。このような視点からマスコットを眺めると、外に向かって発信される「安価な広告塔」としての側面ではなく、ジモトでは少しは名を知られた「小さな人気者」という第二の側面がようやく浮かび上がってくる。

現代のゆるいマスコットたちは、彼らの地元を代理-表象（represent）している訳ではない。言い換えれば住民たちは、マスコットを特に自分たちの町のシンボルだとは思っていないのである。

fig.2: 中世・フランドル伯の紋章

対照的に、例えば中世ヨーロッパにおける貴族たちの紋章（エンブレム）は、——それがデザイン的には今日のゆるキャラと五十歩百歩であるにも拘らず——まさに換喩的なシンボルでり、すなわち代理-表象された彼らの誇りと血統そのものなのであって、貴族たちは高く掲げられたその旗の下で自ら

の生命を投げ打つことすらあった。

要するに、マスコットたちを「安価な広告塔」と見るようなまなざしは、どこかで存在することと代理-表象すること（present と represent）とを混同してしまっていたのだった。そして、この前者の「存在」の側面は、これまでの地域活性化を巡る議論の中でほとんど見落とされてきたと言ってもいい。

「存在感（プレゼンス）」は、現代のマーケティングにおけるキーワードのひとつであり、例えば環太平洋パートナーシップ協定（TPP）の原協定、第 16 章第 16 条には、アジア・オセアニア諸国の「小国同士の戦略的提携によってマーケットにおけるプレゼンスを上げる」という目的が明記されている[2]。無論ここでプレゼンスと呼ばれているのは、第一に市場における（通商）プレゼンスのことだが、「存在感を示す」ことの具体的な内容の方は、実は曖昧なままである。その言葉は、ある者が無視できないほどの影響力を持っていると周囲の他の者たちが意識すること、またそのことによって彼が一目置かれ優遇されるといった事態を、漠然と指している。今日重視されている「存在感」という考え方は、以下に述べる「名声」の概念ともほぼ重なり合っているのだが、ゆるキャラの存在に新たな角度からの分析を加えるためには、こうした概念の系譜および社会との関係について、一度振り返っておく必要がある。

2.　名声（セレブリティ）への欲望とその歴史的系譜

1970 年代以降の現代社会（ポスト近代）において、名声（セレブリティ）[3]を求めることの内実は、近代におけるそれとはやや性質を異にしているだろう。やや先取りして述べるなら、現代の名声は「自己承認」の欲望と深い関係で結ばれつつも、経済的成功からは再切断された位置にある。卑近な例を挙げるとすれば、自分の言動や作品について誰かから褒められること、「すごいね」「いいね」と言ってもらうこと、そうした他者からの承認が、（時にナルシシズムと形容される）現代型主体のセルフエスティームを支えていく。

---

[2] Text of Original Trans-Pacific Strategic Economic Partnarship Agreement, (cf. http://www.mfat.govt.nz/downloads/trade-agreement/transpacific/main-agreement.pdf)

[3] 日本語の「セレブリティ」ないし「セレブ」の語には、豪奢で絢爛豪華な大富豪、あるいはハリウッドスターのようなニュアンスが含まれているが、もともとの語（celebrity）の方は、良きにつけ悪しきにつけよく人々の口の端に上り、評判の立つ有名人といった意味合いである。この論考の中では、この言葉を後者の意味合いで用いる。

G.-H. ミードやエリクソンがその古典的著作の中でそれぞれ述べていたように、親、教師、友人といった「重要な他者」からの承認は、主体に相手への基本的信頼を形成させ、また「世間」や「社会」といった「一般化された他者」からの承認は、他者全般への信頼をゆっくりと育んでいく。

近代から始めよう。社会学者マートンがアノミー論で触れていたように、経済的成功を収めることと、衆目を集め「名声」を獲得すること（有名になること）は、「追いかけるべき目標」として近代人に課された社会的目標だった。確かに、富の獲得と名声の獲得とは近代社会においてはしばしば重なり合ってしまったため、この「名声」という目標は、富に付随するものと見なされて（すなわち裕福になれば自然と有名になっていくはずだと見なされて）、陰に隠れてしまっていたけれども、つまるところセレブリティを望むことは、富への欲望と並び、近代社会が公的に人々にその追求を推奨していた何かだったのだ。

やや細かい話になるが、19 世紀後半から 20 世紀の初頭にかけて、（当時の古い心理学で）いわゆる本能論がもてはやされていた頃、上記のような欲望はそれぞれ「金銭欲」「名声欲」と呼ばれていた。それらは合わせて「社会的欲求」と呼ばれたが、そうしたものが、人間という生き物には（食欲や性欲と同じように）もともと本能として備わっているのだと考えられていた時代があった。しかし、これらの社会的成功に向けられる欲望は、あくまで社会の側がつくり出したものなのであって、その社会の価値観やものの見方が「学習」されることによって、ようやく人々に習得されるものなのだった。だからこそ、時代や場所が異なれば、「社会的成功」の具体的ヴィジョンも、人々が何を欲するかも変わってくるのである。

名声についてもう少し踏み込んで考えてみると、例えば 18 世紀、『法の精神』のモンテスキューにおいては、富の追求と名声の追求の二つは、まだはっきりと別のものとして区別されていた——ただし彼はそれを「名誉」（honneur）と呼んでいたけれども。モンテスキューによれば、民主政体を動かしている動力原理が「徳」（利他的行為や献身を促すもの）であるのに対して、貴族制（アリストクラシー）に支えを持つ君主政体の動力原理は「名誉」である。「名誉の本性は優遇と特別待遇とを要求するにあり」、故にそれは不平等を肯定する原理となる（Montesquieu 1989[1748]: 80）。

名誉には、現代の我々の目からすればどこか奇妙にも映る数多くのルールがある。例えば、主君のために戦い、戦場で命を落とすことは最高の名誉だった。生命を重んじてはならず、名をこそ重んじねばならない。また序列を大切にし、自分がある位階に置かれたな

らば、自らがそのクラスより下に見られるような振る舞いは、決してしてはならない等々。モンテスキューは主に貴族たちの話をしていたのだが、そこにおいて名誉というものは、時に（個人名というよりは）「家名」に傷がつくような真似をしてはならないという厳格な禁止の掟となり、また時に彼らの自尊心（プライド）を満たす美酒ともなるのだった。

名声への欲望の系譜についてより詳細に見るため、もう少し視点を広げつつ歴史を紐解いてみよう。古典主義期のヨーロッパにおいて、「セレブリティ」あるいは「有名人」の最も典型的な表象をなしていたのは、（当然のことながら）君主であり国王だった。そうした「特別な存在」が人々の興味注目を集めていたことの分かりやすい例は、当時の幾多の精神病理の記録の中に見出されるだろう。例えば 17 世紀のデカルトが、『省察』（1641）の中で「狂気たち」の代表的イメージとして引用していたのは、強い妄想の存在、とりわけ「極貧の身なのに自分が帝王であると言い張る者」だった。またセムレーニュの報告によれば、19 世紀初頭のパリのビセートル精神病院には、自分は「ルイ 16 世」だと名乗る患者が同時に 3 名存在したことがあるという（Foucault 1975[1972]: 518-519）。そして 1888 年に精神に変調をきたしたニーチェは、翌年 1 月に次のような手紙を友人たちに書き送っている。

> 「私が人間だというのは偏見です。でも私は確かに何度か人間たちの間で人間として生きてきました。そして人間の経験しうる最低のことから最高のことまでの全てを知っています。私はインドではブッダだったし、ギリシアではディオニュソスでした――アレクサンダー大王とカエサルは私の化身で、また同様に私はシェークスピアでもあったし、フランシス・ベーコンでもありました。最も最近では、ヴォルテール、そしてナポレオンでしたし、おそらくリヒァルト・ワーグナーでも…。」（cf. Foucault ibid.: 558）

こうしたケースに見られるような、自らを偉人たちと同一視するような態度は、もちろん精神疾患に伴う妄想という特殊な状況下において現れたものなのだが、これも間接的には、名誉や名声というものに高い社会的価値が置かれていたことからの帰結だったろう。つまり、正常な精神の持ち主にも多かれ少なかれ宿っている名声への欲望――現代社会においてこれは、「私はここにいる」と誰かに認められたいという「自己承認の欲望」へと変奏されて現れることもある――が、妄想のような病理的状態においては、まるで拡大鏡で見た

時のようにはっきりと観察されてくるということなのである。

名声の獲得を巡る問題は、自尊心（プライド）やセルフ・エスティームの高さとも密接につながっている。先ほどの 19 世紀パリの精神病院に現れた 3 人の「ルイ 16 世」のケースにおいて、ある日彼らの間に口論が起こったことがあった。その時、医師は彼らを一人ずつ廊下の隅に呼び、「あなたこそが本物の国王なのに、どうして偽物たちと無益な口論などするのですか」となだめることで、彼らを満足させ大人しくさせたという。こうした逸話は我々を微笑ませる何かかもしれないが、ここで問題になっているのはやはり、彼らの自尊心を尊重することだったのだ。

近代以降の名声は、(時に生命を投げ打つことを要求する) かつての名誉ほど激烈なものではない。それは第一に有名であること、つまりいい噂も悪い噂も含め、自分の存在や言動が注目を浴びることや、人々の話題に上ること——ひいては存在感（プレゼンス）を示すこと——を意味している。金銭的に裕福であることはここでは二次的で副次的な要素に過ぎない。ただし近代型の名声は、やはりどこかで名誉の後継概念だった。そのことは名声が、自らと（無名の）他者たちとの間に何らかの不平等と落差を生み出し、またそこから生まれる上から見下ろすような視線が、自尊心を満たすのに役立つという点から見ても明らかである。ただし、モンテスキューが指摘していたように、近代の民主主義は平等の原理をその基盤に置くため、少なくとも政治的な権利に関しては (一票の格差の問題など) 不平等は認められなくなっていった。ここにおいて不平等が容認されていたのは市場をおいて他にない。名声の追求という社会的目標とそれによる格差は、先述したように、近代社会では「経済的成功」という大きな言説の陰に隠れて気付かれにくいものになっていくのだが、そのことの背景には以上のような事情があったものと思われる。

3. ローカルセレブの変容とメディアの変遷

次に、地域社会（ローカルなレベル）に焦点を合わせつつ、セレブリティ（有名さ）というテーマをさらに掘り下げてみよう。かつて、地域において名声を得ていた者（地元の有名人）の代表例はといえば、大地主、富豪、政治家、大学教授、医師などの、いわゆる「地元の名士」だった。彼らは高い金銭的収入と社会的地位を兼ね揃えた、典型的な近代型ローカルエリートである。彼らはまた実際の権力と権威とを（その地域の中では）持ち

合わせていた。つまり彼らはその人脈と口利きの影響力によって、ローカルな世界をある程度動かすことができた。

これに対して、1970 年代以降の後期近代、特にバブル崩壊後の日本においては、もうひとつのタイプの「地元の有名人」が存在感を示しはじめる。それは上記のものとはまた性質を異にしていた。この第二のタイプの有名人は、テレビ・ラジオなどの「地方局」の司会者（パーソナリティ）やローカルタレント、地方新聞のエッセイスト、ご当地アイドル、そして地域のゆるキャラ（マスコット）などを含んでいる。

第一のタイプの有名人は、地域での尊敬を集めて、人々より上位の社会的ポジションに立とうとする。ところが第二のタイプの振る舞いはその逆である。彼らはむしろ人々を喜ばせ、自らをネタにしてでも笑いを取り、社会的下位のポジションを取ろうとする。したがって、前者の「地元の名士」のような近代型ローカルエリートを「オーソリティ（権威）型」と呼び、後者の（時に B 級とも揶揄される）後期近代型ローカルセレブリティを「エンターテイナー型」と呼ぶことができるかもしれない。そして、ローカルなセレブリティにこのような変化が起こったのは、彼らが名声を得る方法やプレゼンスを示す方法、すなわち情報伝達メディアの形式に起こった変容と深い関わりがある。以下ではしばらく、その変遷について見ていくことにしたい。

古典古代から中世にかけての時期において、人々の間の情報伝達ルートはほぼ「口コミ」や「噂話」といった対面型コミュニケーションに限られている。古代叙事詩として名高いイリアスやオデュッセイア、ラーマーヤナやマハーバーラタ、平家物語と言った神話的な英雄譚は、吟遊詩人たち（琵琶法師たち）の歌による口承の物語だった。古い書物（パピルスの象形文字や粘土板のくさび形文字に始まるが）に残されたものがあったとすれば、それは基本的に宮廷付きの書記官たちによって記述された正史であり、カエサルやクレオパトラといった君主たちの生涯に関する（美化された）記録だった。なお、書物や芸術作品の作者が判明するようになるのは、14 世紀イタリア・ルネサンスの頃からであり、ミケランジェロ、ダ・ヴィンチ、ダンテ、ボッカチオ、チョーサーといった名前とその評判が、地域レベルを超えて近隣都市や国王の耳にまで届くようになる。

15 世紀の活版印刷技術の開発は、書物を取り巻く事情を激変させた。情報メディアが口コミに限られていた時代には、高いセレブリティを持つ存在は、ほぼ神話や伝説上の英雄たちと、宗教上の聖人たち、国王などの君主たちに限られていたのだが、「本の著者」たちがここに加わるのである。それは詩人たちや作家たちに、神学者や哲学者といった知識人

たちを加えた「文人」たち（hommes de lettres）だった。識字率の低い時代には彼ら文人たちは、言わば内輪のみに開かれた討議の場を持っているに過ぎなかったかもしれないけれど、活版印刷された書物というのは、言わば初めて登場した「マスメディア」（不特定多数への情報発信を行う媒体）だった。その後 18 世紀に、本格的なマスメディアである「新聞」がいよいよ中産階級のためのものになると、カフェやサロンでは熱心な政治議論（そして無駄なおしゃべりとしてのバヴァルダージュ）が交わされるようになる。この時、政治家たちは（半ばアイドルのような）人気商売の性質を帯び始め、紙面で報じられる他の事件の犯罪者ともども「有名人」となっていった[4]。

どこか大衆迎合的な傾向を持つ「エンターテイナー型」のセレブリティの最初の小さな萌芽は、恐らくこうした所にすでに見られるのだが、それがよりはっきりした形で示されるのは、19 世紀に写真と映画が、そしてとりわけ 20 世紀にラジオとテレビが登場してからのことだった。俳優や歌手、スポーツ選手や芸能人たちが、そこでは人気のある「スター」となっていく。ただし彼ら「人気者」たちは自らを大衆に売り込み、媚びなくてはならなかった。あくまで大衆の思い描く期待通りの偶像（idol）を演じねばならなかった。

他方で、一般の市民たちは、もちろんこの間ずっと情報の受け手の位置にあった訳ではない。吟遊詩人に聞いた物語を友人に話して聞かせる時、彼はもう情報を運ぶ媒体の一部となっている[5]。特に近代以降に与えられるような、新聞や雑誌の投書欄や、ラジオのお便り紹介コーナーは、一般参加者がマスメディアの情報の送り手の側に回る貴重な瞬間である。ハガキ職人たちはせっせと投稿し、自分の作品が取り上げられれば体を震わせて喜ぶ。その番組に「出演」し、目に見えない多くの読者・視聴者の前に立っている感覚が、彼を感動させるのだ。ここにはやはりセレブリティへの欲望がある。ときに、日記をつけることが単なる人生の記録を取ることと異なっているのは、それが秘私的な自己との対話であるはずなのに、いつか誰かに読まれる可能性をどこかで意識しながら書かれる点においてである。同様に、カセットテープに自分の歌声を吹き込むのは、密かに自らをラジオから

---

[4] もちろんこの時、マスメディアによる情報発信は、手紙や本と同様、ローカルレベルの境界を遥かに越えて、他の町あるいは国へと拡散していけるような長い射程距離を（可能性として）備えている。

[5] ラテン語に「書簡上の時称」（epistolary tenses）――受取人が手紙を開封するのが未来になる点を考慮して現在の事象を過去形で書く――が存在するように、厳密には、情報の送り手と受け手を区別することは難しい。受け手であるはずの者が、例えばテレビのスイッチを入れない限り、あるいは手紙を開封しない限り、情報は送信されていないことになるからだ。したがって彼らは、自らをメディアの位置に置いている。口コミで入ってきた情報をさらに遠くへ流したり、本を読み聞かせたり、新聞を回し読みしたりする。そしてそのプロセスにおいて（伝言ゲームのように）情報を無変化のままでは決して通過させない点において、彼らはやはり情報のメディア（媒体）なのである。

流れる歌手の歌声へと同一化するためであり、またビデオカメラで家族や友人を撮影するのは、一緒に擬似的なテレビ出演体験をするためだったとも言える。つまり人々はハガキ職人とならないまでも、常に小さな情報の送り手となりうるのであって、さらに言えば情報の記憶装置（メディア）というものは、まさに「記録や記憶に残るような」セレブリティへの欲望をかなえるのに適した形で、市場に用意されているのである。

20 世紀の末以降、急速に整備されたインターネットの情報通信網は、この流れにさらに大きな加速をもたらす。個人ホームページ、ブログ、SNS、そして youtube などの動画配信サイトには、（コメント欄、「いいね！」ボタン、トラックバックやリツイートといった）利用者たちに小さなスター気分を味わわせるような種々の仕掛けが盛りつけられている。自らの写真や映像を晒すこと、公開日記を書いてプライベートを暴露すること、評論家のように何かを寸評すること、そして周囲の反応に一喜一憂すること。これが、現代社会における小さな有名人（プチセレブ）たち——ブロガーや youtube セレブたち——の姿なのだった。

したがって、つまるところこうした後期近代の「自己承認の欲望」の出現の根幹にあったのは、第一に、大衆とマスメディアの協力関係によってつくり出された理想の偶像、第二に、その偶像が立つための、衆目を集めることができると目された架空の開かれた場所＝「舞台」の存在、そして第三に、一般人が疑似体験的にでもその「舞台」へと降り立ち、偶像に自らを同一化することを手助けするような、記号消費を巡るあらゆる情報メディアだったということになる。自己承認＝誰かに自己の存在価値を認めてもらうことは、ナルシシズムの炸裂ではない。それは社会の生み出した名声（セレブリティ）への欲望の、ひとつのヴァリエーションなのである。

4. ネットアイドルからご当地マスコットへ

このような流れを大まかに把握した上で、地域社会とローカルセレブの話へと戻ろう。メディアの利用という観点からすれば、地方の名士、すなわち「オーソリティ型」のローカルエリートは、古典的な方法によってその名声を得ようとする傾向にあった。つまり、本を書くこと（作家、大学教授）、地方新聞に記事が載ること（政治家）などによってである。他方で、後期近代の「エンターテイナー型」のローカルセレブは、比較的新しい方法、

つまり地方局のテレビ番組に出ることやインターネット上でプレゼンスを示すことなどによって、その名声を得る傾向にあると言える。

ただしひとつ注意が必要なのは、ローカルな場面での情報伝達の主要な方法が、あくまでも「口コミ」であり、このことは昔も今も変わっていないということである。ローカルエリートたちは、地元の人脈を作り、維持することによってその権威を維持してきた。しかしながらそれは、人口の移動があまり激しくない時代にこそ適切かつ有効なやり方であった。あるいは、人の移動があまり無いような小さな市町村において、有効な方法であった。電話やインターネットは確かに、離れた場所に住む知人に口コミ情報を短時間で回すことを可能にしたけれども、彼らの目的が結局、得た名声でもってその人脈を形成維持しつつ、自らの権威や既得権益を守っていくことにあったが故に、ローカルエリートとマスメディアとの相性は、それほど良いものではなかったのだった。

これに対して「エンターテイナー型」のローカルセレブは、知人だけではなく、不特定多数へと躊躇なく情報を配信していく。彼らの目的は名声を得ることそれ自体に、ないしは自らの存在を多くの人に知ってもらうことそのものにあるからだ。インターネットがヴァーチャルな口コミの関心空間として有効に機能すると見抜くや否や、彼らは広大な二進数の銀河へと漕ぎ出した。それは単なる自己満足に過ぎないかもしれないし、地域に何も役立っていないかもしれない。それでも、彼らが漕ぎ出していったというその事実が決して無意味ではないことを、少なくともそれが現代社会の示す変動の何らかの反映であることを、我々は見逃すべきではない。

ローカルセレブの作られ方は大きく分けて二通りある。ひとつはローカルエリートからの転身であり、もうひとつは草の根的に無名の個人から立ち上がってくるパターンである。そして、この論考で取り扱っている地域の手作りマスコットの場合は、後者のパターンが該当している。

この場合、最初の情報の発信手はあくまで個人だった。インターネットおよびそれを取り巻く PC 環境の発達と低価格化は、何ら高い経済資本も文化資本も持っていない一般人たちに、小さな情報発信局となることを許した。自作のイラストを、楽曲を、短編小説を、スクリプトを、それぞれ jpeg に、mp3 に、txt に、exe ファイルに変換して、ネット上にリリースする者たちが現れた。彼らはそれぞれの趣味において、その道のプロに憧れを持った、しかしながらその世界で戦う気概はそれほど強く持ち合わせていないような、アマ

チュア（愛好家）だった[6]。

やがて通信の回線速度が上がってくると、Podcast などの音声配信サービスを利用して自分の（ネット）ラジオ番組を始める者たちが、そして自分を撮影するための小型カメラと動画配信サービスを使って「ネットアイドル」を目指す者たちが現れる。ネットアイドルはある意味では、インターネットの生んだ草の根的プチセレブの非常に典型的なモデルだ。それは個人から発信される。そしてしばしば、他にも多数存在する同様のネットアイドルたち（ライバルたち）の中に埋没してしまい、顧客やフォロワーがほとんどつかない状況に陥る。「プレゼンスを示す」という言葉が重要性とリアリティを持つようになるのは、まさにこうした埋没の局面においてである。個人からインターネット経由でグローバルレベルに向けて行われる情報発信は、常にこうした自己喪失のリスクにさらされている。

これに対して、昨今の商店街の祭りなどの小さなイベントに時折登場するような、「ご当地アイドル」（ローカルアイドル）は、このような埋没をあらかじめ回避したモデルだった。つまり全国区での名声を得ることを一度断念し、情報の発信範囲をローカルレベルへと制限することで、言わばライバルたちに囲まれない状況を人工的に作るのである。ここで彼女たちには、ある程度の顧客と「舞台」が確保されていく。また低予算で呼ぶことができるという点で、イベント主催者側とも利害の一致を見ることになる。ただし忘れてはならないのは、彼女たちがあくまでアマチュア（素人）だということだ。成功してメジャーデビューする望みを持っていたとしても、その実現可能性が限りなく低いことを、当人たちは自覚している。だからある程度充実した時間を過ごしたと思えば、そこから「卒業」していってしまうのだった。

素人の手による、手作りのゆるキャラ（ご当地マスコット）が誕生するのは、このような背景に支えられてのことである。一方で自治体にとってすれば、長期不況が地方経済を圧迫する中、マスコットのデザインをプロのデザイナーに頼むようなことは難しくなっていった。他方で自己の才能を試したくて発表の場を求めていた若い世代は、無報酬でも喜んでその仕事を引き受けていく。この両者の思惑が交わるところに、手作りのゆるキャラ

[6] もちろんセミプロとなって市場へ売り出していくケースもあるが、大部分の者は金銭的な見返りを求めない。基本的に彼らには、自分の作品を誰かに見てもらいたい、そして評価を（できれば褒め言葉を）もらいたいという願望がある。評価されることによって彼らは自分の才能を認められたと思い、自尊心を満足させる。付言しておけば、自分の作品をネット上にアップロードするというのは、（大前提として）痛いくらい恥ずかしいことなのであって、最初は緊張で震えてマウスクリックできなくなるほど勇気の要ることなのだ。だが他者からの褒め言葉は不思議な力を持っており、その心的葛藤を乗り越えた勇者の名誉心を満たす、余りある報酬となるのである。

が、そして「エンターテイナー型」の草の根的ローカルセレブが生み出されることになるのである。したがってこれは、経済的成功を目指すプロのデザイナーの下請けというよりは、名声とプレゼンスを求めるネットアイドルのモデルに近い。

また、手作りのご当地マスコットが示す「プレゼンス」に着目してみれば、それは、地域に密着することで、ある程度の数のフォロワーを（つまりは自分を映してくれる「鏡」を）手に入れた「ご当地アイドル」が示すプレゼンスに近いと言える。そこでは情報の発信が行われる範囲は狭い地域内のみへと制限され、口コミが依然として強い力を持っている。このようにして「局所的な」（ローカルな）名声を得た、しかしライバルたちに囲まれてその他大勢の中に埋没することがないようなタイプの、ローカルな手作りマスコットが誕生してくるのである。

5. イミテーションと「反転したグローカリゼーション」

他方で、こうして生み出されたゆるいご当地マスコットたちの容貌が、不思議とどこか似通ったものになっていくという現象についても触れておかねばならないだろう。彼らを並べ、背負った特産品を外してしまえば（時には外さずとも）、どのキャラクターがどの地域から生まれてきたのかを判別するのは不可能に近い。それらは総じて、どこかで見たようなキャラクターであり、何らかのアイデアのコピーから生まれてきたものだったりもする。ゆるキャラという存在全般への批判的まなざしは、こうしたところからも発生する。つまり、マスコットを作って設置するという行為は、（キャラクターによる観光誘致や地域おこしの）すでにある成功したビジネスモデルの劣化版イミテーションを繰り返し生み出すことであり、経済的成功をおさめる見込みのない物悲しい試みであると。

しかし、ここで地域活性化＝経済的成功というファクターを一度括弧にくくり、それを度外視してみると、ゆるいマスコットたちはまた別の顔を見せる。それは成功したローカルビジネスモデルを参照して生まれるのではなく、また単なる自己満足や内輪の盛り上がりが重要なのでもない。それはむしろ、成功したローカルセレブリティモデルを参照点にして生み出される側面を持っている。

上述したように、身分制度が取り払われた後に起こる「近代化」のプロセスは、理屈の上では全ての市民が平等であると仮定しながら、経済的成功と社会的名声の獲得という二

つの社会的目標を見分けがつかないほどに結びつけた。またそのことによって、（実際には決して埋められることのなかった）格差や社会的上下関係を、市場のロジックと階級の言説へと回収してしまった。後期近代にさしかかって、この二つの社会的目標の再分離が起こるのだが、その動きは近代化を支え続けていた、個々人が利益獲得のために努力すれば市場は全体として拡大へ向かうはずだという 18 世紀古典派経済学の前提が、ついに崩れ始めたこととパラレルだった。

この後期近代においてマスコットたちの目標は、メディアへの露出、端的に言えば「テレビに出ること」に近いものになっていく。そのことによって彼らは名声を得て、知名度を上げ、ローカルなプレゼンスを示すことができるようになるからだ。後期近代のメディアとゆるキャラたちは不可分に結びついている。そこではあくまでプレゼンスを示すことが重要なのであって、その先に経済的成功のゴールは設定されていない。また、そのプレゼンスが影響を及ぼす範囲は、全国区まで行かずとも、ローカルな地域（ご当地）レベルでも構わない。町を歩く人々が振り返ること、声をかけてくること、そうしたことがセレブリティに許された「特権」なのである。

全国のゆるいマスコットたちがどこか似通ってくるのは、単なる（成功例への直接的参照による）イミテーションやコピーによる伝播ではない。むしろそれは、セレブリティの何らかの標準的な「パターン」が定着した後に、ある種のグローカリゼーション——世界標準を自分たちに合う形にローカライズしながら受容すること——の作用によって同時多発的に起こるのである。そして、この標準的「パターン」の形成を促したのは、この場合は後期近代への転回、すなわち（シリアスな）ローカルエリートから（おどけた）ローカルセレブへという地域特権階級モデルの転回だったと言えるだろう。ゆるキャラのケースで言えば、そこで要求されているのは、洗練されたデザインではなく、ある種の「子どもっぽさ」である。それは大きな目や短い手足といった、漫画的な表現をとって表されていることも多い。マスコットたちは、人から馬鹿にされることを恐れない存在なのだ。むしろ、愚かさを演じ、自ら下位にへりくだることによって、人々が「上から目線」の位置に立つことを促していく。そして、「私は馬鹿なので笑ってください」というユーモアの笑いを提供する。だからこそゆるキャラは「エンターテイナー」たりうるのだけれども、こうした点が、（権威と既得権益に支えられ、経済的成功による地域活性化を目指していた）近代型ローカルエリートには理解されない点なのであって、またそれは、彼らがマスコットの「安価な広告塔」以外の側面に気づかなかった原因でもあるのだった。

したがって、ゆるいご当地マスコットたちは、地方を起源として草の根的に立ち上がってきたものではない。換言すればそれは、地方がかつて宿していた「どうしようもなくしょっぱいもの」の最後の残光なのではない。それは最初から、用意されたパターンに則って形成される。そして言わばグローカリゼーションが反転された形で、彼らはメディア上で一堂に会し、その相同性（キャラかぶり）を再確認することになるのである。地方都市、とりわけ郊外の光景が（ジャスコやイオンなどのショッピングモールなどによって）極めて近似的なものに収斂していく様子（ファスト風土化）は、ビジネスによって先導されていたこともあり、比較的理解し易いモデルを我々に提示してくれた。だがゆるキャラのケースにおいては、その同じプロセスが、さも地方から発信されたかのような装いをまといつつ、より入り組んだ経路（反転したグローカリゼーション reversed glocalization）をとって行われているのである。

似通ったゆるキャラたちが集合し、各自が地域の代表者の位置へと置かれてしまう時、彼らはもう市場（マーケット）へと巻き込まれ始めている。差異化を図って商品価値を高める記号消費の時代には逆説的な出来事だが、そこにおいてはローカルなものが持っていた個別性や特異性は消去されていく。だからこそ、マスコットたちの代理-表象（represent）機能ではなく、ローカルな場面におけるその存在（present）そのものに着目することが重要性を帯びてくるのである。そうして見出されたのは、権威型ローカルエリートからエンターテイナー型ローカルセレブへという転回だった。後期近代のご当地マスコットは、ローカリティの変遷のあり方の一端を示す縮図でもあるのである。

おわりに

ゆるいマスコットを、失敗した地域活性化の例として切り捨てることは簡単かもしれない。もし安易に郷土愛の広告塔として利用されるようなことがあれば、それは確かに批判の対象となって然るべきだろう。それでも筆者にはどうしても気にかかっていることがひとつあった。この試論の中では十分に考察することができなかったが、それは、ゆるキャラたちの持つ、ゆるさややる気の無さが、近代の前進主義やネオリベラリズムのモチベーションと起業家モデルに対する、徹底したアンチテーゼとなっている点である。ローカルなものとグローバルなものがダイレクトに相互貫流する現代において、それは、中央／地

方（周縁）というかつての二分法モデルで捉えられる何かではなくなっている。

JR 大曽根駅の西へと伸びる商店街をもう一度眺めてみると、生活空間としてのリアルな町そのものが、何らかの偶像をそこへ立たせるためのヴァーチャルな「舞台」へと組み替えられていった様子を、感じ取ることができる。それは 2012 年のゆるいマスコットの登場によって起こった変化ではない。よく考えてみるとそれは、1980 年代後半に「まちづくり」が商店街のアーケードを破壊して、道幅を広げ、ここを白くて奇麗な町へと作り替えてしまった時に、すでに始まっていたのだ。

環境が人をつくり、人が環境をつくる。セレブリティへの欲望は、メディアの形式の歴史的変遷と足並みを揃えるようにして、その姿を変化させてきた。そしてこの「人の側の変化」は、町のあり方そのものにも、つまり「まちづくり」のやり方にも、ダイレクトに影響を与えてきたのだった。誤解を恐れずに言えば、後期近代社会において、人々は「舞台」の存在を欲しているのだろう。そのようにして、インターネット上に用意されていた架空のそれが、現実世界へと流れ出て、商店街に設置されるに至ったのである。

「オーソリティ（権威）型」のローカルエリートが主導するまちづくりは、彼らの思い描く「成功」のヴィジョンと長期不況という現実が噛み合なかったこともあり、ほぼ成功することはなかった。その一方で「エンターテイナー型」のローカルセレブは、オルタナティブな、また別のかたちでのまちづくりを選ぶ。アマチュア化し、採算のことを気にしない彼らは、もし許されれば町をカンバスに思い思いの絵を描き、人々に笑顔を運ぶこともできるだろう。確かにこうした傾向は、ガバナンスに巻き込まれ政治利用され、「やりがいの搾取」のような問題へとつながっていく危険性を指摘されることもある。だが他方で、そこには新たな地域再生のポテンシャルも存在しているのである。見知らぬ他者たちの間に「相互承認」と漠然とした信頼関係が生まれ、監視強化とはまた別種のルートによって生活空間の「安心・安全」がもたらされるのではないか。その可能性の若い芽を摘み取るべきではないし、死んだはずの商店街は、そのための〈場〉を提供できるはずなのだ。そして「おおぞねこ」の邪気の無い笑顔には、その夢の実現可能性を感じさせる何かがあったような気がする。

＊＊＊

主要参考文献

Foucault, Michel, *Histoire de la folie*, Paris, Gallimard, 1972（田村俶訳『狂気の歴史：古典主義時代における』、新潮社、1975）.

Montesquieu, Charles Louis, *De l'esprit des lois*, Paris, Gallimard, 1951[1748]（野田良之、稲本洋之助、上原行雄、田中治男、三辺博之、横田地弘訳『法の精神』、岩波書店、1989）.

建築家の職業アイデンティティの構築をめぐって

―カテゴリーをめぐる地方建築家の実践―

松村淳

１.問題の所在

求人情報誌を見れば、自分らしさを生かす仕事などという惹句を簡単に見つけることができる。それは日々の糧を稼ぐために働くという労働本来の持つ意味が後景化し、近代とはまた違った意味で労働が個人のアイデンティティと密接に結び付くようになっていることの証左である。

つまり、労働において、生活の糧を稼ぐというためという本来の目的は後景化し、「仕事における自己実現の欲求の拡大」（渡邊 二〇〇八）が前景化している。U.ベックはそのような動機で選ばれた職業は、労働市場における「ブランド商品」として、つまり、商品のように認定された資格として了解されている（ベック 一九九七：九一）と述べる。そのような状況下において、人々は「もはやどのように労働するのかを知っているだけでは十分ではなく、どのようにして商品を売るのか、そしてどうすれば自分自身を売ることができるのかをも同様に知らねばならない」(カステル 二〇一二)。のである。そしてそれはあらゆる労働者に職業アイデンティティの確立を促していくのである。人々はどのように職業アイデンティティを構築するのだろうか。めまぐるしく状況が変わる中、一貫した職業アイデンティティなるものは可能なのだろうか。しかしながら、先行研究において職業アイデンティティが十分に議論されてきたとは言い難い。労働者や職業をめぐる社会学的研究は貧困や差別、過労死、過剰労働などといった社会問題と結託することで、解決されるべき政策的イシューとして俎上に挙げられ検討されてきたのである。それゆえに、それぞれの職業を、一人ひとりの労働者がどう生きているのか、その職業をどのように受け入れ、どうアイデンティファイしているのか、などといったことに関して経験的、実証的な研究はあまり行われてこなかった。阿部真大が自らも一バイク便ライダーとして現場に身を投じた参与観察を基に書き上げたエスノグラフィー（阿部 二〇〇五、二〇〇六）など一部の仕事を除いては、職業の内実に切り込みその世界の内側を記述分析した先行研究は少ないのが現状である。

2. 本稿の目的と分析資格

2・1 分析視角

そこで、本稿ではこれまで十分に検討されてこなかった職業アイデンティティについて、それが、言説空間における実践のみならず、言説空間と実体空間における実践との往還の中で構築されていく事を、建築家を事例に検討していくものである。

本稿に登場する建築家の中には十分に実績を積んだ建築家でありながら、語りの局面においては建築家の自称をためらう者や、建築家としての実作がほとんどないにもかかわらず建築家を自称する者がみられた。このような実践は、「カテゴリーとして一枚岩的に機能する記号」としての職業認識が不十分であることを証明するばかりか、職業アイデンティティというものを素朴に想定することを許さない。「私は建築家である」という言表が単純に職業アイデンティティを示唆するものではないということを示すものである。

そこで、本稿ではまず、複雑で多様な職業の内実に分け入り、建築家における「カテゴリーと主体との複雑な関係」（飯田 二〇〇一:九十八）として職業アイデンティティを把握することからはじめる。そして、カテゴリーとアイデンティティについて分厚い研究の蓄積があるジェンダー研究やセクシュアル・マイノリティ研究の理論と手法に依拠しながら、「アイデンティティは、言説実践においてパフォーマティヴに構築される」（伊野 二〇〇一:四十六）。という構築主義的なアプローチを援用する。例えば、伊野真一は同性への性的意識に自覚的な男性に対するインタビューの結果において、彼らが例外なく「ゲイ」「同性愛者」「ホモ」「オカマ」などのカテゴリーを引用していることを紹介しながら、その引用の仕方について、何の迷いもなくカテゴリーを引用する者がいる一方で、これらのカテゴリーでは自己を表現できないことを吐露する者もいることを明らかにする（伊野 二〇〇一）。そして「自己を語るという行為に付随するのは、まさしくカテゴリーの引用という言説実践であり、そのカテゴリーの引用とアイデンティティの内容は非関与であるということである」（伊野 二〇〇一:四十六）。と結論付けている。

本稿に登場する建築家はそれぞれ、「建築家というカテゴリー」を引用しながら自己を語るのであるが建築家というカテゴリーを引用することにある種の抑圧を感じている。本稿では、従来の構築主義的なアイデンティティ理論に依拠しながらも、本稿ではその枠組みに収まりきらない問いを提示したい。それは建築家の職業アイデンティティは言説空間だけでなく、実体空間をも巻き込み、言説空間と実体空間を往還しながら構築されていくのではないかという問いである。

建築家の場合は仕事の結果が建築物として物理的に立ち現れるのであり、それは「私が設計した建物」といった記名性を帯びるのである。建築家としての経験を積み、個人の「作風」が確立されていくと「この建物は誰々の作品」だというように、建物が建築家の作家性を表象するようになる。本稿では実作としての建物を「一貫した作風」の元に作ることができているものと、そうでないものに分け、それぞれがどのように、アイデンティティを構築しているのかを記述分析していく。

2.2 調査対象者の概要

筆者はこれまで、西日本にある A 県を対象に建築家や建築士等、建物の設計管理を行う専門職に就く人々の調査を行ってきた。二〇一一年七月から二〇一二年六月にかけて四名の建築家 A 氏、B 氏、C 氏、D 氏に聞き取りを行った。四名の概要は以下のようになっている。

A 氏は地元の高校を卒業後、関西地方の工業大学で建築を学んだ。その後地元に戻り県下では規模の大きな設計事務所に入所し経験を積み独立し、現在に至る。コンスタントに仕事は続けているものの、多種多様なクライアントの様々な要求に応えつづけてきた結果、その作風には一貫性が無い。

B 氏は三〇代半ばの建築家である。地元の高校を卒業後北陸地方の工業大学に進学し、そこで建築を学んだ。中学生くらいの頃から将来は建築家になりたいと決めていたという。大学卒業後は地元に帰り、家業を手伝いながら二十八歳で一級建築士の免許を取得し設計事務所を開設し現在に至っている。まだ実作はほとんどなく、家業である内装業を手伝いながら生計を立てている。

C 氏は、四〇代後半の女性である。地元の高校を卒業後中国地方の大学で建築を学び、その後は大手ゼネコンに入社、数年働いたのちに帰郷し数社の設計事務所を経て独立し現在に至っている。その作風は、外壁にガルバニウム鋼板を多用しつつ、木材を効果的に使用することによって柔らかさを演出するものである。

D 氏は四〇代前半の男性建築家である。地元の高校を卒業後、建築家を多く輩出している京都の大学、大学院で学び大手建築設計会社に入社した。そこでしばらく経験を積んだのち、木造の伝統的な家屋を手掛ける設計事務所でさらに経験を積み、帰郷後に独立した。彼の父親と弟が経営する工務店との設計施工体制を確立している。彼の作風は、A 県の木材を多用しながらも、コンクリートや鉄骨造を巧みに組み合わせることによって、伝統建

築の枠組みにとらわれることないデザインを確立している。建築専門誌にも作品が掲載されるなどその評価は高い。

4.「作風」を持つ建築家たちの実践

建築家の中には、自らを「自分は一応建築家です。」などと留保をつけた言い方をする者も少なからず存在する。それは、彼らが自己の職業を語るときに引用する建築家というカテゴリーと、自分が今行っている現実の仕事との間に乖離があるということの証左である。第二章で建築家の歴史を振り返ったが、確かに百年に余る建築家の歴史と、ながらくそれが「エリート」を中心に担われてきたことを考えると無理もない事ではある。とはいえ、「建築士」や「設計士」などといったその他のカテゴリーで代用することはできない。そこで、彼らはカテゴリーに抱く違和感を調停するための様々な実践を行っているのである。そして、それは建築家としての実作を、ある程度一貫した作風の下につくり続けることができた者と、そうではない者との間に大きな違いあるのである。そこで、以下では、C 氏、D 氏を前者、A 氏、B 氏を後者の事例としてとりあげ、それぞれの実践に就いて検討していく。

4.1 カテゴリーへの違和感

ある程度一貫した「作風」を確立し、順調にクライアントを獲得することができている者の中にも、建築家というカテゴリーに違和感を覚える者は少なくない。次に紹介する語りは、理想的で規範的な建築家カテゴリーに違和感を覚え、そのカテゴリーとのずれたところに着床してしまったアイデンティティをどのように肯定していくかという実践である。

> 年配の人は「オレは自分のことは建築家とは思っていない、そんなことは人が決める」という。でも、自分たちは建築家だと思うし、そもそも設計士という言葉は無いしね。明確に、私は建築家であるというべきだと思うし、もちろん認められるだけのことはしていかないとダメですけど。私もなんか、言いにくいですものね。自分のこと建築家ですって。（仕事は）何をやっていますかと聞かれて、建築家ですって正面きって言いにくいですね。（C 氏）

この語りには彼女の逡巡がよく表れている。「明確に、私は建築家であるというべきだと思

うし、もちろん認められるだけのことはしていかないとダメ」という語りの後に、「私もなんか、言いにくいですものね。自分のこと建築家ですって。」と語りがくる。さらに「建築家という呼称をすごいものとしてとらえないでいいのかもしれない」と述べた後で「安藤さんと一緒というとちょっとねえという感じになる」と語っている。この語りから看取されることは、彼女自身が抱く、建築家というカテゴリーに対する違和感である。つまり、彼女のアイデンティティは建築家というカテゴリーからずれたところにあるのである。

4.2 カテゴリーからの離脱

カテゴリーへの違和感は、カテゴリーからの離脱を促していく。

> 建築家という呼称をすごいものとしてとらえないでいいのかもしれないですね。絵を描いている人は画家じゃん、建築を作っている人は建築家じゃん、それでいいような気がします。建築家というと安藤さんを思い浮かべますが、安藤さんと一緒というとちょっとねえという感じになるけど、ちゃんと設計で生計を立てられているのなら建築家でいいのかなと。（C 氏）

さらにこのように述べ、彼女は建築家という名前を、建築設計のみで自律して仕事をしていると自認するのであれば自由に使うべきだと述べる。認められるべくきちんとした仕事をしたうえで、建築設計という仕事で生計を立てることができているのなら建築家と名乗っても良いのではないか」と語っているのである。たとえ建築家カテゴリーに違和感を持っていても、それに代わるカテゴリーは存在しないのであり、それゆえに、その違和感を適切に調停していく「カテゴリーとの交渉」が必要となる。

私は独立した時に、自分で三つのきまりをきめたんです。ひとつは、設計をするのには契約をしてからじゃないとしない。そもそも本当は簡単にプランを出して、それが流れちゃって、お金を全然もらえないっていうのが今も昔も設計事務所に多くあることですが、設計料は値引かない。絶対に値引きしない。これが二つ目。値引きするならやりません。もうひとつは、絶対に自分の顔が出る仕事しかしない。つまり下請け仕事はしない。そのかわりにどんなに小さな仕事でもいい。自分がやったって表に出せる仕事しかしない（C 氏）。

語りの中に繰り返し「自分」という言葉が出てくることからわかるように、彼女は、カテゴリーから距離を置き、そこから離脱しようとしているのである。そして「自分」を出発点とした新しい建築家像を構築しようとしている。なぜ、彼女は自分の仕事をアイデンティファイするときに、建築家というカテゴリーに依存する必要性が無くなってきているのである。なぜ、彼女はそれが可能なのだろうか。

5.建物が「構築」するアイデンティティ

5.1 作風の確立

C 氏と D 氏は地元では成功した部類の建築家である。順調にクライアントを獲得し、所員もそれぞれ数名ずつ雇用している。

彼らに共通することは、それぞれが自分の作風を確立しているところである。両者ともに、それぞれの作風を最大限に取り入れた事務所を構えている。D 氏の事務所は、A 県の郊外の山間部に近い自然豊かな場所に立地している。A 県の木をふんだんに使いながらも、コンクリートや鉄骨といった構造をうまく使いながらモダンな外観に仕上げている。内部は「ロの字」型になっており、中心部は光が落ちてくる「光庭」③となっており、その周囲に事務所スペースがあり、スタッフのデスクが配置されており、一部が打ち合わせスペースになっている。そこに座ると、絶妙に視線を制御するように設置された大きな「はめごろし」の窓によって切り取られた田園風景が一望できる。

一方 C 氏の事務所は A 県の県庁所在地の中心部にある。C 氏の両親の自宅と自身の自宅を兼ねた三階建ての建物である。外壁は明るい銀色のガルバニウム鋼板で覆われ、建物正面の二階、三階部分は木のルーバー④で覆われている。事務所スペースは一階部分である。クライアントは、駐車場の脇から明るい灰色のタイルで覆われた小道を通ってアプローチする。そこには、三階部分にまで達するケヤキの木が一本植えられている。事務所内に入ると、奥が作業スペース、手前が打ち合わせスペースである。クライアントは手前の打ち合わせスペースに通される。そこには、無垢の白木の丸テーブルと、同じ素材で作られた椅子が設置されている。音質の良い、ごく控えめな音でジャズが流れている。

このように、手がける建物に「その建築家らしさ」が現れる、つまり作風が確立されていくと、クライアントがその作風を踏襲した住宅を求めてやってくるのである。

（私のクライアントは）なんか、こう、木の家に住みたいな、自然素材の家に住みた

いな、でも伝統的な日本家屋は嫌だなという人たちが多いですね。そういう人が、街中を車で走っていて、こんな感じいいよねっていう感じの建物を見かける。何度も見かける。それを作っているところはどこだろうと、探し回って、うちの事務所にたどり着いてくれる。そういう人がけっこう多いです（D 氏）。

クライアントは公務員とか社長さんとか収入の面でしっかりされている方が多いです。『渡辺篤の建物探訪』が大好きな人が結構多いですね。なんでもいいから建ててという人はまず来ないですね。圧倒的にお客さんの外車率が高いです。決してお金持ちとかじゃないですよ。こだわりを持ったお洒落な人が多いですね（C 氏）。

D 氏は事務所の宣伝を全く行っておらず、ウェブサイトも開設していない。事務所も郊外の不便な場所にある。それでも彼のもとをおとずれるクライアントは引きも切らない。彼らは、自分たちの「作風」を好み、理解してくれるクライアントを獲得することに成功している。その結果、作風の一貫性に資するような住宅が建てられる。そしてそれを見たクライアントが同じような住宅を依頼しにくる、という好循環が構築されているのである。自ら作り上げた建物が、彼ら自身の職業アイデンティティを補強するものとして機能する。ゆえに、彼らは自分が建築家なのか、そうでないのかといった職業アイデンティティをめぐる政治はもはや重要ではない。それは以下の語りからも明らかだ。

なんかこう、建築家、建築家ってうるさいんですよね。建築家というのは、僕の感覚でいえば、自称ではなくて他称なので、まあ、全然建築を知らない人が、「あの人建築家なんだよ」って人に呼ばれているくらいが正しくって、自分で建築家なんて言い始めると怪しくなるので、言わない方がいいんじゃないですかって言ったんですけど。そんなの気にしてるのA県の人ぐらいなもんじゃないのって思ったのですけどね（D 氏）。

彼に建物の設計を依頼するクライアントの多くは、彼が過去に手掛けた建物を見て、その作風を気に入って依頼を決めている。ゆえに、D 氏とクライアントは建物に媒介された信頼関係で結ばれているのである。それらは、すべて閉じた信頼関係の円環の内部に存在するのであり、改めて外部に向かって建築家であることを提示する必要はないのである。そ

れでも、必要があるときに限って、つまり円環の外部に向けて自らの職能を語る必要が生じたときに、他に適切なカテゴリーが存在しないため、建築家というカテゴリーを引用しながら語るのである。しかしながら、彼は円環の外に向かって積極的に語ろうとはしない。何故なら地方都市では建築家というカテゴリーはまだ人口に膾炙しているとは言い難く、理想の住宅を求めて「ピンポイント」で彼のもとを訪ねてくるクライアント以外には、そのカテゴリーが響かないことを彼は知っているからだ。

6.建築家と認められないことの苦悩

前章でとりあげた者たちのように、自らの作風を確立し建物を媒介とした信頼関係をクライアントとの間に取り結ぶことができない（難しい）者もいる。

> なんでうちに（依頼しに）来たんだろうって思う人もいますね。アメリカンチックな感じでとか、ログハウス風でとか自分でイメージを作ってくる人（B 氏）。

この語りは、B 氏の自己認識とクライアントの B 氏に対する眼差しがずれてしまっていることを証明するものである。B 氏はまだこれといった実作がなく、コンペなどに挑戦しながら家業の手伝いで生計を立てている。そのような者は、クライアントと建物と自分自身という、安定的な閉じた信頼関係の円環を築いていくことは容易ではない。その結果、建築家として承認されることに主眼が置かれ、とりわけ、言説を通じて自身を建築家として呈示していくことに比重が置かれる。そこには、建築家というカテゴリーを理想化、規範化する傾向が確認できると同時に、建築設計を生業しながらも、他のカテゴリーに属する者たち（建築士、設計士等）から相対的に優位な位置を心的に確保するために彼らに対する排除の機制がみられる。

6.1 規範的な建築家像

建築士の連中だったら、これを建てて後から（完了検査後に）繋げたらいいとか、なんかね、やってはならない法を犯してしまうことがあるかもしれん。（建築家であるならば）法律違反は絶対にやったらあかん。法律違反の手助け的なこともやったらいかん。次に独立性があるということ。専業の設計という業務を持ってないとあかん。工務店をかたわらに

やっとる設計ではダメ。儲けようと思うのが第一になるから。三番目が芸術性。これらの三つの指標が建築家の条件やね。（A 氏）

彼がここで語っていることは、〈法令順守〉〈独立性〉〈芸術性〉という三つのキーワードである。これは建築家憲章で掲げられているテーマ⑤とほぼ合致する。つまり、きわめて理想主義的で、規範的であるといえよう。彼にとっての建築家カテゴリーは上記のようなものであるが、彼はこれを引用するというより、カテゴリーとの同化を目指している。
彼ら「建築家とはこうあるべき」といった規範的、理想的なカテゴリーイメージを持っている。
したがって、それを引用しながら自己を語る、つまりは建築家と名乗ることは大きな心理的負担を伴うものでもある。

6.2 半端なうちには名乗れない

医師や弁護士であれば、資格を得ると同時に自称は可能である。しかし建築家の場合は少し複雑である。建築家は国家資格ではないので、名乗るのは自由である。その点では画家や彫刻家などと似ている。しかし、建築家の場合は実際に建つ建物を設計するという職能なので、デザイン以外にも構造や法規などに知悉しておく必要がある。ゆえに、ほとんどの者が一級建築士の資格を有している。
一級建築士を取得したら建築士とは名乗れる。しかし、建築家と自称するにはいくつかのステップがある。いちばん手っ取り早いのは先述したように、有名大学を出て「建築スクール」に身を置くことであろう。しかし、建築家というカテゴリーが大衆化した現在では、そのような「建築スクール」に身を置くことによって得られる資源を全く持たない者達が建築家を志すようになっている。現在は建築家を自称する B 氏であるが、学歴もコネも実績もない状態からどのようなタイミングで建築家を自称してもいいと考えたのであろうか。

建築家というのは、昔からいつそれを名乗るかというのを悩んでいました。半端なうちに建築家を名乗るのはちょっと違うなと思っていて、「自称建築家」もいやだなと思っていて。あるコンペに入賞したんですよ。それが本になって、若手建築家って言われて本に載せてもらったので、本で若手建築家って言われたので、それ以降は建築家って名乗っていいのかなと思って、名刺にも建築家と入れて営業するようになりました。それまでは、まだち

ょっと。なかなか、そうそう名乗っていいものとは思わなかったので、ひょいひょい建築家って名乗っている人をみると、それはいいのかという気持ちになりましたね（B 氏）。

彼は「半端なうち」に建築家を名乗るのはちょっと違うと感じていたと語っているが、有名建築家主催のコンペの受賞歴という資源を得たことによって、ようやく建築家と自称することを自分に許したのである。また、A 氏も独立後、建築家としての仕事をするために、自らに規範を設けそれを守ってきたことを以下のように語っている。

独立するときに、明日からでないとダメなのか、10 年先でもいいという違い。このスタンスは随分と違う。明日から（食べていきたい）なら下請けに入ってしまう。当時で一番早かったのはハウスメーカー。そこの下請けになったらすぐに仕事をくれる。でも下請けしてしまうと、ずーっとそればっかりしてしまう。そのうち、それで安定してしまう。月々何件って（仕事が）入ってくるから、それに慣れてしまうと、錆び付く。そうではなくて、一日、一か月、一年待てるか。辛抱がどれだけできるかで差が出てくる（A 氏）。

彼は、生活が苦しかったが、食べるために下請け仕事などに手を出すことを自分に禁じた。それをしてしまうと建築家としてやっていけなくなると考えていたからだ。彼はそれを忠実に守った。その結果、貯金を使い果たし、ギリギリのところまで追いつめられたこともあったという。建築家というアイデンティティを保持するために、多大な犠牲を支払ってきた履歴が彼の建築家を名乗るための資源となっているのである.

6.3 建築士との差異

前節でみたように、彼らは建築家を名乗るために、つまり建築家というカテゴリーを引用するために高いハードルを設定し、それを乗り越えてきたことを語る。その建築家としての矜持は同業他者に対する排除の機制となって現れる。

僕は建築家としてやっていこうと思っているので、建築士としての免許は意識的に忘れています。建築士の資格は単なる免許ですね。建物を建てる時に必要な。建築士の人に建築家的なあこがれがあるのが分かるんですよね。でも、（建築家と建築士は）完全にすみ分けて、もっと明確にすみ分けたほうがいいかもと思います。芸術を意識するのは建築家で、

建築士は芸術を意識する必要はありません。建築士がやるデザインはそういうの（有名建築家のデザイン）をパクッたりすればいいんですよ。僕はお客さんの意見を聞いてそれを、そのまま形にするというのはやりたくないけど、建築士は逆にお客さんの意見をきいて、それをきちんと作れる人であればいい。（B 氏）

このように、B 氏は建築家と建築士との違いを強調し、明確なすみわけの必要性を訴える。この語りの背後には、地方都市において、いまだ十分に建築家という職能が認知されておらず、ゆえに、本来、建築家のもとに来るべきクライアントの多くが、工務店やハウスメーカーあるいは、建築士、設計士とカテゴライズされる業者の下に流れているのではないかという疑念がある。

6.4 メディアに向けられた批判

彼らはそろってこのような混乱した状況をもたらした一因としてメディアの影響を訴える。

なんかな、あの、アホな番組あるでしょ？ビフォー・アフターか。A 県から三人出たんよ。彼らの中にビフォー・アフターに出たって押し出して営業している人おるわ。「ビフォー・アフター出ました」って。これは恰好わるいで。こんな番組に出る人は建築家協会から外そうで。だいたい、天井を自分でぶち抜いたりしてる時点で施工やっとるもんな。そんなんやるなよ。まあ匠っていう名前でしよるから、いいけど。建築家でないからね。はっきり謳ってくれたらいいんやけどね。これは番組制作上のことで、一般の建築家はこんなことしませんと（A 氏）。

匠とかそういうものばっかり知られてしまっているのですね。ああいうのが建築家と思われてしまっている。住宅のそういうこまごましたデザインみたいな、一発芸みたいなものを披露して、自分でトンカチ持ってとか、そういう人が建築家だっていうイメージを一般の人は持ってしまっていますよね。これはもう完全にメディアの影響ですよ。それはすごく感じます。ビフォー・アフターの人が一般的な建築家のイメージになりつつあるのは、問題ですね（B 氏）。

この語りの中に登場するテレビ番組は、ゴールデンタイムで放送され人気を博しているものであるが、彼らはこの番組が「誤った」認識を流布していると糾弾するのである。彼らがそろってこの番組を激しく非難する理由は、この番組によって「ミスリード」されたクライアントが彼らの元を訪れることがあるからだ。「僕のところに雨どいが壊れたから来てくれって電話がかかってきたことがある。A 氏」というように、番組の中で「匠」がやっているような仕事を依頼されることがあるというのだ。また、B 氏は建築家のイメージが毀損されることを危惧している。もっとも、この番組出てくる設計者は「建築家」ではなく「匠」と称されているので、建築家のイメージを直截棄損するものではない。しかし、B 氏も述べるように建築家のただでさえ少ない言説空間における位置が、「匠」によって脅かされることを懸念しているのである。この番組とは対照的に、建築家の間で評価の高い番組がある。「渡邊篤の建物探訪」というその番組は、番組ナビゲーターの渡邊が建築家によって設計された建物を訪問し、すでにそこで生活をしている施主の案内を受けながら、淡々と建物を紹介していく内容である。そこでは、建物は建築作品として、設計者は建築家として取り扱われている。建物の改造過程をみせる前者とは違い、この番組は竣工後、すでに使われている状態の建物を紹介する。ゆえに、「演出」もなければ、「ドラマ」もない。

ビフォー・アフターのような「軽薄な」番組に出演して有名になったとしても、彼は、少なくとも同業者からは建築家であると承認されることはない。A 氏が「こんな番組に出る人は建築家協会から外そう」と述べているように、むしろサンクションの対象にすらなる。この番組に登場する「建築家／建築士」は「匠」という名で呼ばれているが、彼らは建物の設計をするが同時に施工も行う。これは建築家カテゴリーから逸脱する行為である。なぜなら、建築家は専業で設計を行うものであり、施工にあたっては施工業者を指名し、その工事を監理監督することが重要な職能の一つであるからだ。

6.5 再帰的に「構築」される建築家アイデンティティと絶えざる自己啓発

以上、見てきたように、一貫した作風を持つ実作がない建築家は、建物を媒介とした職業アイデンティティの構築が困難である。ゆえに、カテゴリーに過剰に依存し、それを理想化、規範化する傾向にある。そしてそのカテゴリーを引用するにふさわしい主体としての自己を再帰的に構築し続けていく必要がある。

ホテルに行って（宿泊カードの）職業の欄に建築家と書けるかどうか。設計士と書くか、自営業と書くか。それで建築家と書けないとだめだ。もちろん自称ですよ。自分が建築家として意識した時に建築家という。自分が建築家という意識がないと、後ろめたい仕事というか、下請けをしたり確認を下したり⑥という仕事が中心になってしまう（A 氏）。

A 氏は、建築家としての意識を持つことが大事であるという。彼は豊富な実績と経験はあるものの、統一された作風を持っているとは言い難い。ゆえに、彼のところには様々なタイプの仕事が来るのであるが、その中で特に、建築家としてのキャリアに資するための仕事を選んで受けるように心がけている。

自分の中では、すべては建築の為に。というのがありますね。何かを食べている時も音楽とかでも影響を受ける時が結構あります。言葉ではうまくいえませんが。建築以外のことでも、することなすこと、建築に還元するためにいろんなことをやっているフシがありますね（B 氏）。

B 氏は、半年をかけたヨーロッパーツアーをはじめ、時間があれば、国内外へ旅に出かけ、建築や都市を見学している。また建築の本以外にも経済学、政治学、マーケティングなど様々なジャンルの読書をするように心がけているという。

考察

以上みてきたように、建築家というカテゴリーで一括りにするには、あまりに多様で複雑な実態を提示することが出来たのではないかと考える。「一貫した作風のもとに作られた建物」という資源を持つ建築家は建物を媒介とすることによって、クライアントと「理想的に」結びつくことができ、それが安定的な職業アイデンティティの安定に大いに寄与していることが明らかになった。一方で、その資源を持たない者は、カテゴリーに過剰に依存し、それを理想化、規範化する傾向があった。

ロベール・カステルが「人びとは、個別にみずからの職業的なアイデンティティを決定し、さらにはそのアイデンティティを相互行為の中で他人に承認させるべく強いられる」（カステル二〇一二：五三三）。と述べるように、流動性の高まった後期近代においては、

すでにある職業を選び、それに自分を合わせていくという受動的な職業意識ではなく、常に能動的で自己決定的な職業アイデンティティの構築が求められる。さらに、それは再帰性の高まった後期近代において、絶えざる見直しと再定義が行われていく終わりなきプロセスである。就職活動をはじめた大学生が取り組む「自己分析」にはじまり、首尾よく就職した後でも、給与の査定や、リストラ、転職機会等に備えて、自分自身の能力と「資源」、そして市場価値を定期的に「棚卸し」し、常に自分を「最新状態」にしておく必要に迫られる。

カステルの述べるように、個別にみずからの職業的なアイデンティティを決定し、そのアイデンティティを相互行為の中で他人に承認させるべく強いられる圧力が高まっている現代においては、適切な職業アイデンティティの（自己）認識と（他者）提示は労働者にとって重要な課題であるといえるだろう。

さらに、グローバル化の昂進とそれにともなう流動性の高まりは、ある職業カテゴリーとその内実の一致を保障しないばかりか、それらの乖離をうながす方向へと加速する。ある一人の労働者が行っている仕事を適切に名指す職業名が存在しないため、別の名前で代用する。あるいは、もともとある職業に「就いた」のであるが、経験を積むうちに、その職業カテゴリーが合わなくなってきたということも起こりうる。また時代の変化により、職業カテゴリー事態が変容したり、消滅したりすることも十分に考えられる。本稿で確認した事例では、皆それぞれに建築家というカテゴリーに違和感を抱いていた。彼らは建築家というカテゴリーと自らの仕事を、それぞれに調停し、操作することによって、折り合いをつけていたが、そのうち、建築家という職業カテゴリーを放棄する者も現れるかもしれない。事実、筆者が聞き取りを行った建築家の中にも、「建築設計者」「アーキテクトビルダー」などといった、新しいカテゴリーを自分で作り、そこへ自分の職業アイデンティティを重ね合わせようとする者もいた。グローバル化や市場化といった大きな要因が地方のローカルな職業の現場に変容をもたらしていることは注目に値する。

注

①馬場璋造によると、日本には数多くの建築家を輩出するいくつかの「建築スクール」があるという。スクールというもののいわゆる学校ではない。有名建築家の事務所や大手建設会社の設計部などの職場である。馬場は「どのスクールからスタートするか、それが建築家としてのその後の軌跡に大きく影響している」（馬場二〇〇二）と述べる。しかし、馬

場がとりあげるような「建築家スクール」に入門できる者はごく限られている。そこに入るには東大、京大をはじめとする多数の建築家を輩出してきた大学の建築学科に合格する必要がある。そして、有名建築家の事務所で学生時代からアルバイトを行い、卒業と同時にそこに就職するというパターンが一般的であろう。そこで一定期間修業を積み人脈を形成し独立するのである。

②もちろん、馬場のいう「スクール」に属さなかった者が「正統的建築家」に属する事ができないということはない。馬場は工業高校卒で「独学」で建築家になった安藤忠雄を「アウト・オブ・スクール」として紹介している。しかし、「アウト・オブ・スクール」の者が正統的建築家に所属することは大変困難である。馬場は以下のように述べている。「若くして、あるいは正当な教育を受けることなしに独創的デザインを成功させる建築家も確かにいるが、そこにも凝縮された自己啓発による「学び」と、不断の研鑽が背後にあることを知らなければならない。それは特殊な、そしてより厳しい道である」（馬場二〇〇二：五）。安藤は卓越した建築の才能のほかにも、元プロボクサーという肩書や、横浜から貨物船で旧ソ連に渡り、そこからシベリア鉄道に乗りヨーロッパに渡り長い建築行脚の旅に出たことなど個人を卓越化させるための数々のエピソードに事欠かない。つまり、唯一無二のキャラクターとして異彩を放っている。つまり、正統的建築家に所属するためには、学歴や職歴を凌駕できるほどの「代替資本」が必要なのである。

③光を内部に取り込むことを目的とした空間。中庭のように人が寛ぐための場所ではない。

④羽板と呼ばれる細長い板を平行に組み、建物の正面などに設置する。デザイン的な意味合いもあるが、視界や日光などを制御するために多用される手法である。

⑤JIA（日本建築家協会）のウェブサイトに掲載されている建築家憲章を以下に記す。

・（創造行為）建築家は、高度の専門技術と芸術的感性に基づく創造行為として業務を行います。

・（公正中立）建築家は、自由と独立の精神を堅持し、公正中立な立場で依頼者と社会に責任を持って業務に当たります。

・（たゆみない研鑽）建築家は、たゆみない研鑽によって自らの能力を高め役割を全うします。

（倫理の堅持）　建築家は、常に品性をもって行動し倫理を堅持します。

⑥建築確認とは、建築しようとする建物が建築基準法などの法規を満たしているかを審査

するものであるが、建築設計事務所の中にはその代行を専業としている者もいる。

参考文献

阿部真大、二〇〇五、「バイク便ライダーのエスノグラフィー―危険労働にはまる若者たち―」『ソシオロゴス』NO.29。

――――、二〇〇六、『搾取される若者たち―バイク便ライダーは見た！―』集英社。

飯田祐子、二〇〇一「文学とジェンダー分析」『構築主義とは何か』勁草書房、八十五－一〇七。

伊野真一、二〇〇五、「脱アイデンティティの政治」、上野千鶴子、編『脱アイデンティティ』、勁草書房。四十三－七十六。

ウルリッヒ・ベック、一九九七、『再帰的近代化―近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房。

馬場璋造、二〇〇二、『日本の建築スクール』王国社。

西山卯三、一九五五『現代の建築』岩波書店。

村松貞次郎、[一九九七]二〇〇五、『日本近代建築の歴史』岩波書店。

ロベール・カステル、前川真行訳、二〇一二、『社会問題の変容－賃金労働の年代記』ナカニシヤ出版。

渡邊聡子、アンソニー・ギデンズ、今田高俊著、二〇〇八、『グローバル時代の人的資源論モチベーション・エンパワーメント・仕事の未来』東京大学出版会。

移動と空間管理をめぐる人びとの日常的実践の場へ
――あのとき・あの場所の「重さ」を記述するために――

稲津　秀樹（関西学院大学）

要旨

本稿では、筆者が阪神地域のフィールドワークの過程で遭遇した（ペルーから移動してきた家族である）ホセさんたちの語りにおいて示唆された問題を、筆者自身の出身地域／ジモトでもある同地域での生活体験を踏まえつつ、不可視化された領域と可視化された領域のあいだで生じている問題として位置づけた。すなわち、ホセさんたちが筆者に投げかけた語りは、人の移動によって変容する都市や地域社会の様相をトランスナショナルな社会空間として肯定的に描きだそうとする都市・地域エスニシティ研究で正面から論じられていない、ネイションへの帰属と監視をめぐる問題へと結びつけて考えられることを提起した。人の移動にかかわる先行研究の検討から仮説的に見出されたのは、移動する人びとをめぐる空間の管理者の日常的な実践に着目することが、移動に伴って重層的に変容する空間の再想像と再管理の動態を記述する上でのパースペクティブとしての重要性である。今後の課題として、他の事例／フィールドとの経験的な関連が提起される。

キーワード：
移動、空間管理、日常的実践、トランスナショナリズム、（平凡な）ナショナリズムと監視の論理

以上

まとめ――ジモト研究の今後の展開と課題

本研究ユニットの 4 人のフィールド調査に基づいたジモトをめぐる論考から明らかになったのは、いわゆる地元志向現象（エンパワメント表象）によって何が不可視化されているのだろうかということである。それぞれ、生活者（利害関係者）として身近な世界の考察を通じて明らかになったのは、地元志向という現象は決して地域や人びとの実態を反映したものではないということである。

川端は、「越境」の体験を通じてジモトという視座が立ち上がってくる様子について描写しつつ、その理論的射程について論じた。これがこのワーキングペーパーの議論全体の基盤となる。渡邊は、失敗と見なされるようなまちづくりのケースから、政策論的アプローチ等では見えてこないローカル社会特有の言説ロジックと、その構造的変容について描出した。松村は、「建築家」というどこかアーティスト性を帯びた称号に対するアンビバレントな態度が、地方都市の職業アイデンティティをめぐる言説において顕在化する様子、およびそれとグローバル化との関連について考察した。そして稲津の論考は、グローバルな移動の自由の増大をめぐる夢想と 9.11 以降の現実との大きな乖離について、つまりとりわけ地域においてはエスニシティとナショナリズムの言説がいまだ監視装置として作動しつづけるという現状について注意を喚起している。

我々はエンパワメントの言説が掲げるような将来のビジョンや希望を、ジモトに見出しているわけではない。執筆者たちは当該地域との関係性が深いゆえに、地に足のついた批判的な考察を進めることを可能としている。むしろ本研究ユニットを通じて明らかになったのは、地元志向現象には生活当事者（利害関係者）の視点が欠如しているということである。フラット化する現実（グローバル化）に対する地元志向現象をめぐる言説が要請されているが、その過程で、不可視化される変数があって、それぞれが異なる変数から不可視化されるジモトの領域を明らかにすることを試みた。つまり、階層、地域性、マイノリティ、ジェンダーといった負の属性が交錯する領域が切り離されるのである。

ただし、本研究ユニットの共同研究を通じて、昨年度と同様にジモト研究に関する様々な課題も浮き彫りになった。とくに本研究ユニットの成果として見込まれていた、地域社会の批判的考察とマイノリティ研究を架橋することにより、グローバル／ローカル、マジョリティ／マイノリティ、包摂／排除といった二項対立的な分析視角によって抜け落ちる

領域で営まれている生活実践の領域を明らかにするという作業をうまく進めていくことができなかった。今後は、ジモトという視座をさらに綿密に定義していくことを通じて、身近な生活世界において周辺化される時空間を客観的に調査するための方法へと高めていくことをめざしたい。

2012 年度次世代研究「地域社会で不可視化された領域を考察するための＜方法としてのジモト＞」（研究代表：川端浩平）による成果である。

【メンバー】（ ）内は 2012 年度プロジェクト時点

川端 浩平（関西学院大学先端社会研究所専任研究員）
渡邊 拓也（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）
平田 知久（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）
森田 次朗（日本学術振興会特別研究員 PD（京都大学大学院教育学研究科））
芦田 裕介（京都大学大学院農学研究科博士課程）
金 泰植（獨協大学非常勤講師）
谷村 要（大手前大学メディア・芸術学部講師）
松村 淳（関西学院大学大学院社会学研究科後期博士課程）
孫 片田 晶（京都大学大学院文学研究科博士課程）
轡田 竜蔵（吉備国際大学社会学部准教授）
越智 正樹（琉球大学観光産業科学部講師）
越智 郁乃（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）
知足 章宏（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）
知念 奈美子（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）
田 恩伊（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）
岩下 史（京都大学大学院農学研究科博士課程）
大前 悠（京都大学大学院農学研究科博士課程）
瀬戸・徐・映理奈（京都大学大学院農学研究科博士課程）
山口 健一（福山市立大学都市経営学部講師）
安井 大輔（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）
仲尾 友貴恵（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）
石井 和也（京都大学文学部非常勤講師）
稲津 秀樹（関西学院大学大学院社会学研究科奨励研究員）